

授業科目	リハビリテーション総論 A	担当教員	森泉 茂宏		
対象年次・学期	1 年・通年	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	リハビリテーション医学の概念と各障害に対するリハビリテーションおよび疾患別のリハビリテーションについて学ぶ。				
到達目標	包括的なリハビリテーション領域における理学療法士としての役割を理解する。				
テキスト・参考図書等	最新リハビリテーション医学 第2版 リハビリテーション総論				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	リハビリテーション領域全体の中での理学療法、作業療法、言語聴覚療法の位置づけと役割を学びます。また、障害者の自立支援や就労支援における現状と課題、理学療法、作業療法の役割について学びます。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	リハビリテーションとは	リハビリテーションの定義と歴史、リハビリテーションの起源から地域包括ケアへ		
	2	障害の病態生理と評価	障害の分類と評価		
	3	チーム医療	リハビリテーション医療の特性		
	4	リハビリテーション治療	リハビリテーション評価と方法		
	5	理学療法と作業療法	各役割と特徴		
	6	疾患と機能障害①	脳血管障害		
	7	疾患と機能障害②	運動器疾患		
	8	疾患と機能障害③	変性疾患、神経・筋疾患		
	9	保健・医療・福祉の連携	リハビリテーション医療と地域包括ケア 障害者の自立支援と就労支援（障害者総合支援法と職業リハビリテーション）		
	10	リハビリテーション工学	リハビリテーション工学の成り立ちと現状		
	11	リハビリテーションと言語聴覚療法	リハビリテーション医療における言語聴覚療法		
	12	身体障がい当事者から見たリハビリテーション	サービスの受け手である障がい当事者本人にとってのリハビリテーションの意味		
	13	多職種連携の基礎と各職種の専門性	リハビリテーションの定義と、現代医療における多職種連携の必要性。		
	14	多職種連携における、対象者を多角的に捉える視点を持つ	看護（生活の24時間管理）、PT（粗大運動・基本動作）、OT（応用動作・作業・精神）、ST（摂食嚥下・高次脳・言語）、社福（制度・環境調整・退院支援）の役割を再定義。		
	15	多職種連携における、対象者を多角的に捉える視点を持つ	看護（生活の24時間管理）、PT（粗大運動・基本動作）、OT（応用動作・作業・精神）、ST（摂食嚥下・高次脳・言語）、社福（制度・環境調整・退院支援）の役割を再定義。		

授業科目	リハビリテーション総論 A	担当 教員 実務 経験	森泉茂宏 有：■ 無：□	整形外科・リハビリテーション科 医師として大学病院、リハビリテ ーション病院等にて勤務。医科大 学において臨床教員としても 10 年のキャリアを有する。
対象年次・学期	1 年・通年	担当 教員	竹中謙将	道内の病院で 10 年、老人保健施 設で 7 年、理学療法士として勤 務
授業形態		実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	武田祐貴 有：■ 無：□	市内脳神経外科病院にて理学療 法士として 12 年間勤務
		担当 教員 実務 経験	和田英峰 有：■ 無：□	市内病院にて作業療法士として 8 年勤務
		担当 教員 実務 経験	有本邦洋 有：■ 無：□	道外医療施設にて理学療法士と して 6 年勤務
		担当 教員 実務 経験	埜瀬充功 有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	石野洋祐 有：■ 無：□	市内病院にて理学療法士として 12 年勤務
		担当 教員 実務 経験	今野靖士 有：□ 無：■	頸髄損傷者当事者
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	リハビリテーション総論 B	担当教員	森泉 茂宏		
対象年次・学期	1 年・通年	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	リハビリテーション医学の概念と各障害に対するリハビリテーションおよび疾患別のリハビリテーションについて学ぶ。				
到達目標	包括的なリハビリテーション領域における理学療法士としての役割を理解する。				
テキスト・参考図書等	最新リハビリテーション医学 第2版 リハビリテーション総論				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	リハビリテーション領域全体の中での理学療法、作業療法、言語聴覚療法の位置づけと役割を学びます。また、障害者の自立支援や就労支援における現状と課題、理学療法、作業療法の役割について学びます。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	リハビリテーションとは	リハビリテーションの定義と歴史、リハビリテーションの起源から地域包括ケアへ		
	2	障害の病態生理と評価	障害の分類と評価		
	3	チーム医療	リハビリテーション医療の特性		
	4	リハビリテーション治療	リハビリテーション評価と方法		
	5	理学療法と作業療法	各役割と特徴		
	6	疾患と機能障害①	脳血管障害		
	7	疾患と機能障害②	運動器疾患		
	8	疾患と機能障害③	変性疾患、神経・筋疾患		
	9	保健・医療・福祉の連携	リハビリテーション医療と地域包括ケア 障害者の自立支援と就労支援（障害者総合支援法と職業リハビリテーション）		
	10	リハビリテーション工学	リハビリテーション工学の成り立ちと現状		
	11	リハビリテーションと言語聴覚療法	リハビリテーション医療における言語聴覚療法		
	12	身体障がい当事者から見たリハビリテーション	サービスの受け手である障がい当事者本人にとってのリハビリテーションの意味		
	13	多職種連携の基礎と各職種の専門性	リハビリテーションの定義と、現代医療における多職種連携の必要性。		
	14	多職種連携における、対象者を多角的に捉える視点を持つ	看護（生活の24時間管理）、PT（粗大運動・基本動作）、OT（応用動作・作業・精神）、ST（摂食嚥下・高次脳・言語）、社福（制度・環境調整・退院支援）の役割を再定義。		
	15	多職種連携における、対象者を多角的に捉える視点を持つ	看護（生活の24時間管理）、PT（粗大運動・基本動作）、OT（応用動作・作業・精神）、ST（摂食嚥下・高次脳・言語）、社福（制度・環境調整・退院支援）の役割を再定義。		

授業科目	リハビリテーション総論 B	担当 教員 実務 経験	森泉茂宏 有：■ 無：□	整形外科・リハビリテーション科 医師として大学病院、リハビリテ ーション病院等にて勤務。医科大 学において臨床教員としても 10 年のキャリアを有する。
対象年次・学期	1 年・通年	担当 教員	竹中謙将	道内の病院で 10 年、老人保健施 設で 7 年、理学療法士として勤 務
授業形態		実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	武田祐貴 有：■ 無：□	市内脳神経外科病院にて理学療 法士として 12 年間勤務
		担当 教員 実務 経験	和田英峰 有：■ 無：□	市内病院にて作業療法士として 8 年勤務
		担当 教員 実務 経験	有本邦洋 有：■ 無：□	道外医療施設にて理学療法士と して 6 年勤務
		担当 教員 実務 経験	埜瀬充功 有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	石野洋祐 有：■ 無：□	市内病院にて理学療法士として 12 年勤務
		担当 教員 実務 経験	今野靖士 有：□ 無：■	頸髄損傷者当事者
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	運動学 A		担当教員	元木 純	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数		時間数
授業目的	理学療法士、作業療法士は対象者の運動、動作、活動を観察・分析して治療に繋げる。この科目では、そのために必要な人間の正常な運動のメカニズムを理解することが目的である。				
到達目標	・ 運動に関する原理・原則など、基本的事項を理解し説明できる。・ 人間の運動の基礎となる、身体 の構造と機能を理解し説明できる。・ 各関節運動の特徴や、運動に作用する筋について説明でき る。				
テキスト・ 参考図書等	基礎運動学 第 7 版				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の 留意事項	人間の運動がなぜ、どのように起こるかを学び、理学療法・作業療法の土台となる学問である。 履修する範囲が広域ですし力学や解剖学の基礎的知識が不可欠なので、予習、復習を十分に行な うこと。				
履修主題・ 履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	運動学の基礎	オリエンテーション、運動学の概念について学習する		
	2	運動学の基礎	オリエンテーション、運動学の概念について学習する		
	3	機能解剖：足	足関節の構造と機能について学習する		
	4	機能解剖：足	足関節の構造と機能について学習する		
	5	機能解剖：膝関節	膝関節の構造と機能について学習する		
	6	機能解剖：膝関節	膝関節の構造と機能について学習する		
	7	機能解剖：膝関節	膝関節の構造と機能について学習する		
	8	機能解剖：膝関節	膝関節の構造と機能について学習する		
	9	機能解剖：股関節	股関節の構造と機能について学習する		
	10	機能解剖：股関節	股関節の構造と機能について学習する		
	11	機能解剖：股関節	股関節の構造と機能について学習する		
	12	機能解剖：股関節	股関節の構造と機能について学習する		
	13	機能解剖：肩関節	肩関節の構造と機能について学習する		
	14	機能解剖：肩関節	肩関節の構造と機能について学習する		
	15	機能解剖：肩関節	肩関節の構造と機能について学習する		
	16	機能解剖：肩関節	肩関節の構造と機能について学習する		
	17	機能解剖：肘関節	肘関節の構造と機能について学習する		
	18	機能解剖：肘関節	肘関節の構造と機能について学習する		
	19	機能解剖：手	手関節の構造と機能について学習する		
	20	機能解剖：手	手関節の構造と機能について学習する		
	21	機能解剖：体幹	体幹の構造と機能について学習する		
	22	機能解剖：体幹	体幹の構造と機能について学習する		
	23	姿勢・歩行	姿勢と正常歩行のメカニズムについて学習する		

[illegible]

授業科目	運動学 B		担当教員	元木 純	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数		時間数
授業目的	理学療法士、作業療法士は対象者の運動、動作、活動を観察・分析して治療に繋げる。この科目では、そのために必要な人間の正常な運動のメカニズムを理解することが目的である。				
到達目標	・運動に関する原理・原則など、基本的事項を理解し説明できる。・人間の運動の基礎となる、身体 の構造と機能を理解し説明できる。・各関節運動の特徴や、運動に作用する筋について説明でき る。				
テキスト・ 参考図書等	基礎運動学 第 7 版				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の 留意事項	人間の運動がなぜ、どのように起こるかを学び、理学療法・作業療法の土台となる学問である。 履修する範囲が広域ですし力学や解剖学の基礎的知識が不可欠なので、予習、復習を十分に行な うこと。				
履修主題・ 履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	運動学の基礎	オリエンテーション、運動学の概念について学習する		
	2	運動学の基礎	オリエンテーション、運動学の概念について学習する		
	3	機能解剖：足	足関節の構造と機能について学習する		
	4	機能解剖：足	足関節の構造と機能について学習する		
	5	機能解剖：膝関節	膝関節の構造と機能について学習する		
	6	機能解剖：膝関節	膝関節の構造と機能について学習する		
	7	機能解剖：膝関節	膝関節の構造と機能について学習する		
	8	機能解剖：膝関節	膝関節の構造と機能について学習する		
	9	機能解剖：股関節	股関節の構造と機能について学習する		
	10	機能解剖：股関節	股関節の構造と機能について学習する		
	11	機能解剖：股関節	股関節の構造と機能について学習する		
	12	機能解剖：股関節	股関節の構造と機能について学習する		
	13	機能解剖：肩関節	肩関節の構造と機能について学習する		
	14	機能解剖：肩関節	肩関節の構造と機能について学習する		
	15	機能解剖：肩関節	肩関節の構造と機能について学習する		
	16	機能解剖：肩関節	肩関節の構造と機能について学習する		
	17	機能解剖：肘関節	肘関節の構造と機能について学習する		
	18	機能解剖：肘関節	肘関節の構造と機能について学習する		
	19	機能解剖：手	手関節の構造と機能について学習する		
	20	機能解剖：手	手関節の構造と機能について学習する		
	21	機能解剖：体幹	体幹の構造と機能について学習する		
	22	機能解剖：体幹	体幹の構造と機能について学習する		
	23	姿勢・歩行	姿勢と正常歩行のメカニズムについて学習する		

[illegible]

授業科目	解剖学ⅠA		担当教員	飯島 治之	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数
授業目的	・生物としての代謝と動物としての運動のための人体の構造を系統的に学び理解することを目的とする。				
到達目標	・理学療法士・作業療法士にとって重要である運動器系としての骨・関節・靱帯・筋およびその詳細について学習し、基礎的知識を身につける。 ・基本的な解剖学の名称と各器官の関連性、および人体に於ける 3 次元的な位置関係について理解する。				
テキスト・参考図書等	カラー人体解剖学 構造と機能：ミクロからマクロまで からだが見える人体の構造と機能 筋学ハンドブック 関節学ハンドブック				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	中間試験、前期試験を実施し、それぞれで 60 点未満の者には再試験を実施する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・学習する範囲・量が膨大なので、講義を集中して受け予習・復習を怠らないこと（怠ると他の科目にも影響します）。私語は慎むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	解剖学概論	解剖学用語、身体各部の名称		
	2	骨学概論	骨の種類、組成、基本構造		
	3	頭蓋骨 1・2	脳頭蓋、顔面骨		
	4	頭蓋骨 1・2	脳頭蓋、顔面骨		
	5	脊柱	椎骨		
	6	胸郭	胸骨、肋骨		
	7	上肢 1・2	上肢帯、上腕骨、前腕、手の骨		
	8	上肢 1・2	上肢帯、上腕骨、前腕、手の骨		
	9	下肢 1・2	下肢帯、大腿骨、下腿、足の骨		
	10	下肢 1・2	下肢帯、大腿骨、下腿、足の骨		
	11	上肢の関節	肩、肘、手の関節		
	12	下肢の関節、（中間試験）	股、膝、足の関節		
	13	筋学概論	筋の種類		
	14	頭部の筋	表情筋、咀嚼筋		
	15	頸部の筋	浅頸筋、舌骨筋群		
	16	胸部の筋	浅胸筋、呼吸筋		
	17	腹部の筋	腹筋、横隔膜		
	18	背部の筋	浅背筋、固有背筋		
	19	上肢の筋 1・2	上肢帯筋、上腕筋、前腕筋、手の筋		
	20	上肢の筋 1・2	上肢帯筋、上腕筋、前腕筋、手の筋		
	21	下肢の筋 1～3、（前期試験）	下肢帯筋、大腿筋、下腿筋、足の筋		
22	下肢の筋 1～3、（前期試験）	下肢帯筋、大腿筋、下腿筋、足の筋			

	23	下肢の筋 1～3、(前期試験)	下肢帯筋、大腿筋、下腿筋、足の筋
--	----	-----------------	------------------

[illegible]

授業科目	解剖学ⅠB		担当教員	飯島 治之	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数		時間数
授業目的	・生物としての代謝と動物としての運動のための人体の構造を系統的に学び理解することを目的とする。				
到達目標	・理学療法士・作業療法士にとって重要である運動器系としての骨・関節・靱帯・筋およびその詳細について学習し、基礎的知識を身につける。 ・基本的な解剖学の名称と各器官の関連性、および人体に於ける 3 次元的な位置関係について理解する。				
テキスト・参考図書等	カラー人体解剖学 構造と機能：ミクロからマクロまで からだが見える人体の構造と機能 筋学ハンドブック 関節学ハンドブック				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	中間試験、前期試験を実施し、それぞれで 60 点未満の者には再試験を実施する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・学習する範囲・量が膨大なので、講義を集中して受け予習・復習を怠らないこと（怠ると他の科目にも影響します）。私語は慎むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	解剖学概論	解剖学用語、身体各部の名称		
	2	骨学概論	骨の種類、組成、基本構造		
	3	頭蓋骨 1・2	脳頭蓋、顔面骨		
	4	頭蓋骨 1・2	脳頭蓋、顔面骨		
	5	脊柱	椎骨		
	6	胸郭	胸骨、肋骨		
	7	上肢 1・2	上肢帯、上腕骨、前腕、手の骨		
	8	上肢 1・2	上肢帯、上腕骨、前腕、手の骨		
	9	下肢 1・2	下肢帯、大腿骨、下腿、足の骨		
	10	下肢 1・2	下肢帯、大腿骨、下腿、足の骨		
	11	上肢の関節	肩、肘、手の関節		
	12	下肢の関節、（中間試験）	股、膝、足の関節		
	13	筋学概論	筋の種類		
	14	頭部の筋	表情筋、咀嚼筋		
	15	頸部の筋	浅頸筋、舌骨筋群		
	16	胸部の筋	浅胸筋、呼吸筋		
	17	腹部の筋	腹筋、横隔膜		
	18	背部の筋	浅背筋、固有背筋		
	19	上肢の筋 1・2	上肢帯筋、上腕筋、前腕筋、手の筋		
	20	上肢の筋 1・2	上肢帯筋、上腕筋、前腕筋、手の筋		
	21	下肢の筋 1～3、（前期試験）	下肢帯筋、大腿筋、下腿筋、足の筋		
22	下肢の筋 1～3、（前期試験）	下肢帯筋、大腿筋、下腿筋、足の筋			

	23	下肢の筋 1～3、(前期試験)	下肢帯筋、大腿筋、下腿筋、足の筋
--	----	-----------------	------------------

[illegible]

授業科目	解剖学ⅡA		担当教員	二宮 孝文	
対象年次・学期	1 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	30 回	時間数 60 時間
授業目的	・生物としての代謝と動物としての運動のための人体の構造を系統的に学び理解することを目的とする。				
到達目標	・具体的には感覚器、消化器、呼吸器、泌尿器、循環器、神経系、内分泌器について学習し、基本的な解剖学の名称と器官の関連性について理解する。				
テキスト・参考図書等	カラー人体解剖学 構造と機能：ミクロからマクロまで				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	・前期試験・後期試験のどちらにも合格すること。 ・試験は 100 点満点中 60 点以上を合格とする。 ・本試験不合格の物に対し、再試験を実施し 60 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	学習する範囲が広範なので、何度も反復して理解を深めること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	循環器	心臓の位置と構造		
	2	循環器	心臓の内部構造		
	3	循環器	体循環と肺循環		
	4	呼吸器	呼吸経路の全体像		
	5	呼吸器	気道と肺の構造		
	6	内臓学総論、消化器	腹腔、口腔		
	7	消化器	食道、胃、小腸		
	8	消化器	大腸、膵臓、肝臓		
	9	泌尿器	泌尿器		
	10	泌尿器	男性生殖器		
	11	泌尿器	女性生殖器		
	12	末梢神経	末梢神経系		
	13	末梢神経	末梢神経系		
	14	感覚器	感覚器（視覚器、平衡聴覚器）		
	15	感覚器	感覚器（視覚器、平衡聴覚器）		
	16	組織（1）	人体の組織と発生		
	17	組織（2）	骨・筋		
	18	組織（3）	神経組織		
	19	中枢神経（1）	神経の変性と再生		
	20	中枢神経（2）	脳の発生		
	21	中枢神経（3）	脊髄		
	22	中枢神経（4）	脊髄		
	23	中枢神経（5）	脳神経		

	24	中枢神経（6）	脳幹
	25	中枢神経（7）	脳幹
	26	中枢神経（8）	小脳
	27	中枢神経（9）	間脳
	28	中枢神経（10）	大脳皮質
	29	中枢神経（11）	大脳髄質・基底核
	30	中枢神経（12）	神経路

[illegible]

授業科目	解剖学ⅡB		担当教員	二宮 孝文	
対象年次・学期	1 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	30 回	時間数
授業目的	・生物としての代謝と動物としての運動のための人体の構造を系統的に学び理解することを目的とする。				
到達目標	・具体的には感覚器、消化器、呼吸器、泌尿器、循環器、神経系、内分泌器について学習し、基本的な解剖学の名称と器官の関連性について理解する。				
テキスト・参考図書等	カラー人体解剖学 構造と機能：ミクロからマクロまで				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	・前期試験・後期試験のどちらにも合格すること。 ・試験は 100 点満点中 60 点以上を合格とする。 ・本試験不合格の物に対し、再試験を実施し 60 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	学習する範囲が広範なので、何度も反復して理解を深めること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	循環器	心臓の位置と構造		
	2	循環器	心臓の内部構造		
	3	循環器	体循環と肺循環		
	4	呼吸器	呼吸経路の全体像		
	5	呼吸器	気道と肺の構造		
	6	内臓学総論、消化器	腹腔、口腔		
	7	消化器	食道、胃、小腸		
	8	消化器	大腸、膵臓、肝臓		
	9	泌尿器	泌尿器		
	10	泌尿器	男性生殖器		
	11	泌尿器	女性生殖器		
	12	末梢神経	末梢神経系		
	13	末梢神経	末梢神経系		
	14	感覚器	感覚器（視覚器、平衡聴覚器）		
	15	感覚器	感覚器（視覚器、平衡聴覚器）		
	16	組織（1）	人体の組織と発生		
	17	組織（2）	骨・筋		
	18	組織（3）	神経組織		
	19	中枢神経（1）	神経の変性と再生		
	20	中枢神経（2）	脳の発生		
	21	中枢神経（3）	脊髄		
	22	中枢神経（4）	脊髄		
	23	中枢神経（5）	脳神経		

	24	中枢神経（6）	脳幹
	25	中枢神経（7）	脳幹
	26	中枢神経（8）	小脳
	27	中枢神経（9）	間脳
	28	中枢神経（10）	大脳皮質
	29	中枢神経（11）	大脳髄質・基底核
	30	中枢神経（12）	神経路

[illegible]

授業科目	基礎理学療法 A		担当教員	横野 裕行	
対象年次・学期	1 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	30 回	時間数
授業目的	理学療法士の仕事の一部を見学・体験し、理学療法士の役割の理解と動機付けとすることを目的とする。 前期は医療者としての接遇や心得・コミュニケーション手法、後期は理学療法士として必要なコミュニケーションの実践や疾患当事者の困りごとについて学ぶ。				
到達目標	① 理学療法士の基本的な仕事や役割を理解し、理学療法士になるために自ら能動的な行動ができる。 ② 理学療法に必要なコミュニケーション手法を習得できる。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	25	前期は日々の授業に取り組む姿勢についてのルーブリック 50%、コミュニケーションおよび、医療面接に関する実技試験 50%で評価する。ルーブリック評価、実技試験は、各々6 割未満となった場合は、取り組み姿勢に関する再レポート課題および、実技試験の再試験を行う。 後期は授業に取り組む姿勢についてのルーブリック 100%で評価する。 前期、後期の点数の比率をそれぞれ 50%、計 100%とし、前期、後期各々60%以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	75			
履修上の留意事項	医療関係職種になることを常に意識すること。 施設見学など、学外活動を多く行う。また、医療職としての実技も行うことから、社会人としてのマナーを身につけるための行動をとること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション・理学療法の基本①	オリエンテーション・基本的態度・医療接遇について学ぶ		
	2	理学療法の基本②	基本的態度・身だしなみ・マナーについて学ぶ		
	3	理学療法の基本③	基本的態度・対象者の関わり方について学ぶ		
	4	コミュニケーションの基礎と身につけ方①	社会人としての基盤とは何かについて学ぶ		
	5	コミュニケーションの基礎と身につけ方②	社会人としての基盤とは何かについて学ぶ		
	6	標本館見学オリエンテーション	標本館見学・施設見学・見学内容をまとめる		
	7	標本館・施設見学①	標本館見学における心得などについて学ぶ		
	8	標本館・施設見学②	標本館見学における心得などについて学ぶ		
	9	医療面接①	医療面接とは何か、理学療法で必要な情報収集の方法について学ぶ		
	10	医療面接②	コミュニケーションを取りながら理学療法に必要な情報収集を行う		
	11	医療面接③	コミュニケーションを取りながら理学療法に必要な情報収集を行う		
	12	病院見学オリエンテーション	見学する施設や理学療法の実務等について学ぶ		
	13	病院見学	施設見学・見学内容をまとめる		
	14	病院見学	施設見学・見学内容をまとめる		
	15	病院見学まとめ	見学内容について発表する		
	16	多職種連携授業①準備	多職種連携授業へ向けた準備を行う。		
	17	多職種連携授業②	多職種連携授業として、OT、ST、CW、SW 学科と合同授業を行う。		
	18	車いす体験授業①	車いす体験授業の準備を行う。		
19	車いす体験授業②	実際に車いすに乗る、操作する体験を行う。			

	20	車いす体験授業③	実際に車いすに乗る、操作する体験を行う。
	21	コミュニケーション技法の 実践①	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図るための準備を行う。
	22	コミュニケーション技法の 実践②	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図るための準備を行う。
	23	コミュニケーション技法の 実践③	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	24	コミュニケーション技法の 実践④	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	25	コミュニケーション技法の 実践⑤	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	26	コミュニケーション技法の 実践⑥	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	27	コミュニケーション技法の 実践⑦	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	28	コミュニケーション技法の 実践⑧	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	29	他学年との合同授業①	実技科目について、2年生に教わりながら練習する。
	30	他学年との合同授業②	実技科目について、2年生に教わりながら練習する。

[illegible]

授業科目	基礎理学療法 B		担当教員	横野 裕行	
対象年次・学期	1 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数		時間数
授業目的	理学療法士の仕事の一部を見学・体験し、理学療法士の役割の理解と動機付けとすることを目的とする。 前期は医療者としての接遇や心得・コミュニケーション手法、後期は理学療法士として必要なコミュニケーションの実践や疾患当事者の困りごとについて学ぶ。				
到達目標	① 理学療法士の基本的な仕事や役割を理解し、理学療法士になるために自ら能動的な行動ができる。 ② 理学療法に必要なコミュニケーション手法を習得できる。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	25	前期は日々の授業に取り組む姿勢についてのルーブリック 50%、コミュニケーションおよび、医療面接に関する実技試験 50%で評価する。ルーブリック評価、実技試験は、各々6 割未満となった場合は、取り組み姿勢に関する再レポート課題および、実技試験の再試験を行う。 後期は授業に取り組む姿勢についてのルーブリック 100%で評価する。 前期、後期の点数の比率をそれぞれ 50%、計 100%とし、前期、後期各々60%以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	75			
履修上の留意事項	医療関係職種になることを常に意識すること。 施設見学など、学外活動を多く行う。また、医療職としての実技も行うことから、社会人としてのマナーを身につけるための行動をとること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション・理学療法の基本①	オリエンテーション・基本的態度・医療接遇について学ぶ		
	2	理学療法の基本②	基本的態度・身だしなみ・マナーについて学ぶ		
	3	理学療法の基本③	基本的態度・対象者の関わり方について学ぶ		
	4	コミュニケーションの基礎と身につけ方①	社会人としての基盤とは何かについて学ぶ		
	5	コミュニケーションの基礎と身につけ方②	社会人としての基盤とは何かについて学ぶ		
	6	標本館見学オリエンテーション	標本館見学・施設見学・見学内容をまとめる		
	7	標本館・施設見学①	標本館見学における心得などについて学ぶ		
	8	標本館・施設見学②	標本館見学における心得などについて学ぶ		
	9	医療面接①	医療面接とは何か、理学療法で必要な情報収集の方法について学ぶ		
	10	医療面接②	コミュニケーションを取りながら理学療法に必要な情報収集を行う		
	11	医療面接③	コミュニケーションを取りながら理学療法に必要な情報収集を行う		
	12	病院見学オリエンテーション	見学する施設や理学療法の実務等について学ぶ		
	13	病院見学	施設見学・見学内容をまとめる		
	14	病院見学	施設見学・見学内容をまとめる		
	15	病院見学まとめ	見学内容について発表する		
	16	多職種連携授業①準備	多職種連携授業へ向けた準備を行う。		
	17	多職種連携授業②	多職種連携授業として、OT、ST、CW、SW 学科と合同授業を行う。		
	18	車いす体験授業①	車いす体験授業の準備を行う。		
19	車いす体験授業②	実際に車いすに乗る、操作する体験を行う。			

	20	車いす体験授業③	実際に車いすに乗る、操作する体験を行う。
	21	コミュニケーション技法の 実践①	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図るための準備を行う。
	22	コミュニケーション技法の 実践②	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図るための準備を行う。
	23	コミュニケーション技法の 実践③	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	24	コミュニケーション技法の 実践④	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	25	コミュニケーション技法の 実践⑤	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	26	コミュニケーション技法の 実践⑥	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	27	コミュニケーション技法の 実践⑦	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	28	コミュニケーション技法の 実践⑧	高齢者住宅に伺い、実際に高齢者とコミュニケーションを 図る。
	29	他学年との合同授業①	実技科目について、2年生に教わりながら練習する。
	30	他学年との合同授業②	実技科目について、2年生に教わりながら練習する。

[illegible]

授業科目	自然科学 A		担当教員	近江谷 和彦	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	【生物学】他の科目の参考となるよう、DNA から生態系まで、生物学の基本的な知識を学ぶ。 【物理学】私たちの生活には物理学により説明できる事象が沢山あり、携帯電話をはじめとする物理学を応用した機器も多い。また、介護・医療の現場でも物理学に基づいた考えは欠くことができない。この授業では、物理学の基礎を学び、理解し、それぞれの分野で私たちの生活、介護・医療との関連性を考える。				
到達目標	【生物学】DNA から生態系までの、生物学の基本的な知識について説明できる。 【物理学】数式を理解し、物理量の計算ができるようにする。				
テキスト・参考図書等	系統看護学講座 基礎分野 生物学 第 9 版 まるわかり！基礎物理 2011 年				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	・定期試験を評価 ・各領域でそれぞれ 6 割以上を合格とする		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	前もって教科書を読んで授業をうけること。学んだことをその日の中に思い起こすこと。疑問点が残ったら早めに解決すること。なお、三角関数については予習しておくことが望ましい。講義を聞いて興味を持った分野は、少しでもよいので関連する事柄を自分で調べてみることを。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	【生物学】：細胞のつくりとはたらき	細胞の構成要素と、それぞれの担っている役割について説明する。		
	2	遺伝情報とその伝達・発現のしくみ	「遺伝子」について、そのつくりと、生命体の中で実際に働きを持つようになるまでの道筋をみる。		
	3	遺伝情報とその伝達・発現のしくみ	「遺伝子」について、そのつくりと、生命体の中で実際に働きを持つようになるまでの道筋をみる。		
	4	生殖と発生	生物が子孫を残す方法と仕組み、および生物の体が形成される過程をみる。		
	5	生命の維持と調節	生命体の様々な系・器官とその役割について説明する。		
	6	刺激の受容と行動	生命体が外界の情報を受け取り、反応する仕組みについて説明する。		
	7	生命の起源と進化	長い時間の中で移り変わる地球環境の中での、生命の進化の歴史をみる。		
	8	【物理学】：物理のルール	物理で使う数字・文字のルール 物理で使う数学		
	9	力学の基本	速度が変わらない運動 途中で速度が変わる運動		
	10	物体の運動と力	力の表し方と力の式の使い方		
	11	圧力のはたらきと物を回転させるエネルギーと運動量	身のまわりの圧力とその影響、物を回転させる力とつり合いの状態、いろいろなエネルギー エネルギーの保存		
	12	気体の運動	熱の基本的な性質 気体が周囲におよぼす力		
	13	波の性質	波の表し方と 2 種類の波 波ならではの現象		
	14	音と光の現象	音の性質と音程の変化 波としての光の性質		
	15	オームの法則	電流と電子の流れ オームの法則		

[illegible]

授業科目	自然科学 B		担当教員	近江谷 和彦	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	【生物学】他の科目の参考となるよう、DNA から生態系まで、生物学の基本的な知識を学ぶ。 【物理学】私たちの生活には物理学により説明できる事象が沢山あり、携帯電話をはじめとする物理学を応用した機器も多い。また、介護・医療の現場でも物理学に基づいた考えは欠くことができない。この授業では、物理学の基礎を学び、理解し、それぞれの分野で私たちの生活、介護・医療との関連性を考える。				
到達目標	【生物学】DNA から生態系までの、生物学の基本的な知識について説明できる。 【物理学】数式を理解し、物理量の計算ができるようにする。				
テキスト・参考図書等	系統看護学講座 基礎分野 生物学 第9 版 まるわかり！基礎物理 2011 年				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	・定期試験を評価 ・各領域でそれぞれ6割以上を合格とする		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	前もって教科書を読んで授業をうけること。学んだことをその日の中に思い起こすこと。疑問点が残ったら早めに解決すること。なお、三角関数については予習しておくことが望ましい。講義を聞いて興味を持った分野は、少しでもよいので関連する事柄を自分で調べてみることを。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	【生物学】：細胞のつくりとはたらき	細胞の構成要素と、それぞれの担っている役割について説明する。		
	2	遺伝情報とその伝達・発現のしくみ	「遺伝子」について、そのつくりと、生命体の中で実際に働きを持つようになるまでの道筋をみる。		
	3	遺伝情報とその伝達・発現のしくみ	「遺伝子」について、そのつくりと、生命体の中で実際に働きを持つようになるまでの道筋をみる。		
	4	生殖と発生	生物が子孫を残す方法と仕組み、および生物の体が形成される過程をみる。		
	5	生命の維持と調節	生命体の様々な系・器官とその役割について説明する。		
	6	刺激の受容と行動	生命体が外界の情報を受け取り、反応する仕組みについて説明する。		
	7	生命の起源と進化	長い時間の中で移り変わる地球環境の中での、生命の進化の歴史をみる。		
	8	【物理学】：物理のルール	物理で使う数字・文字のルール 物理で使う数学		
	9	力学の基本	速度が変わらない運動 途中で速度が変わる運動		
	10	物体の運動と力	力の表し方と力の式の使い方		
	11	圧力のはたらきと物を回転させるエネルギーと運動量	身のまわりの圧力とその影響、物を回転させる力とつり合いの状態、いろいろなエネルギー エネルギーの保存		
	12	気体の運動	熱の基本的な性質 気体が周囲におよぼす力		
	13	波の性質	波の表し方と2種類の波 波ならではの現象		
	14	音と光の現象	音の性質と音程の変化 波としての光の性質		
	15	オームの法則	電流と電子の流れ オームの法則		

[illegible]

授業科目	実践コミュニケーション A		担当教員	小野 直也	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数		時間数
授業目的	医療職におけるコミュニケーションの重要性や医療職に必要とされる、接遇・態度・マナーについてその重要性を理解する。				
到達目標	コミュニケーション手段の種類とその特徴・利用法について理解し、対象者や場面に合わせたコミュニケーションが実践できる。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	40	提出課題と定期試験の合算で評価する。 定期試験で 6 割以下の場合には、再試験の対象となる。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	60			
	その他	0			
履修上の留意事項	コミュニケーションスキルの問題は必ず誰もがぶつかる壁である。対象者をはじめ他者との関係作りの基本となるものなのでとても重要である。積極的に演習に取り組むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	イントロダクション、対人援助とコミュニケーション①	授業の概要と予定、成績評価、指導と援助		
	2	対人援助とコミュニケーション②、コミュニケーションの分類①	指導と援助、コミュニケーションの語源、分類		
	3	コミュニケーションの分類②、コミュニケーション効果	コミュニケーション効果、メッセージ、挨拶、敬語		
	4	交流分析①	私とは何者か、三つの自我、自我状態の確認、交流パターン分析		
	5	交流分析②	他者からみたエゴグラム、エゴグラム分析		
	6	他者からみた自分	他者から見た自分（フィードバック、ジョハリの窓）、Positive feedback（ほめる、ほめられる）		
	7	指示・助言・支持①	指示（ブラインドウォーク）		
	8	指示・助言・支持②	助言（助言カード）		
	9	指示・助言・支持③	支持（支持トレーニング）		
	10	傾聴と共感①	アクティブリスニング、受容		
	11	傾聴と共感②	共感		
	12	コミュニケーション技法①	促し、繰り返し、明確化、要約、共感		
	13	コミュニケーション技法②	共感、開かれた質問、解釈		
	14	コミュニケーション技法③、接遇	保証、沈黙、対決、接遇の意味と必要性、尊敬語、謙譲語、丁寧語、実習先への電話がけ、身だしなみマナー		
	15	実践コミュニケーション	これまで学んだコミュニケーションスキルの実践		

[illegible]

授業科目	実践コミュニケーション B		担当教員	小野 直也	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	医療職におけるコミュニケーションの重要性や医療職に必要とされる、接遇・態度・マナーについてその重要性を理解する。				
到達目標	コミュニケーション手段の種類とその特徴・利用法について理解し、対象者や場面に合わせたコミュニケーションが実践できる。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	40	提出課題と定期試験の合算で評価する。 定期試験で 6 割以下の場合には、再試験の対象となる。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	60			
	その他	0			
履修上の留意事項	コミュニケーションスキルの問題は必ず誰もがぶつかる壁である。対象者をはじめ他者との関係作りの基本となるものなのでとても重要である。積極的に演習に取り組むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	イントロダクション、対人援助とコミュニケーション①	授業の概要と予定、成績評価、指導と援助		
	2	対人援助とコミュニケーション②、コミュニケーションの分類①	指導と援助、コミュニケーションの語源、分類		
	3	コミュニケーションの分類②、コミュニケーション効果	コミュニケーション効果、メッセージ、挨拶、敬語		
	4	交流分析①	私とは何者か、三つの自我、自我状態の確認、交流パターン分析		
	5	交流分析②	他者からみたエゴグラム、エゴグラム分析		
	6	他者からみた自分	他者から見た自分（フィードバック、ジョハリの窓）、Positive feedback（ほめる、ほめられる）		
	7	指示・助言・支持①	指示（ブラインドウォーク）		
	8	指示・助言・支持②	助言（助言カード）		
	9	指示・助言・支持③	支持（支持トレーニング）		
	10	傾聴と共感①	アクティブリスニング、受容		
	11	傾聴と共感②	共感		
	12	コミュニケーション技法①	促し、繰り返し、明確化、要約、共感		
	13	コミュニケーション技法②	共感、開かれた質問、解釈		
	14	コミュニケーション技法③、接遇	保証、沈黙、対決、接遇の意味と必要性、尊敬語、謙讓語、丁寧語、実習先への電話がけ、身だしなみマナー		
	15	実践コミュニケーション	これまで学んだコミュニケーションスキルの実践		

[illegible]

授業科目	情報科学ⅠA		担当教員	赤尾 みどり	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	この授業は、本校における学習に必要な、情報リテラシーと Microsoft Word、Excel、PowerPoint の操作方法を身につけることを目的とする。また、それらを利用して、パソコンを有効活用するための知識と操作法を習得する。				
到達目標	①Word を使ってレポートが作成できる。 ②Excel を使って表や図が作成できる。 ③PowerPoint を使ってスライドが作成できる。 ④情報化社会でのモラルや責任について、自己の考え方を説明できる。				
テキスト・参考図書等	30 時間アカデミック 情報リテラシー Office2016 Windows 10 対応				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	・各試験の平均点 50% ・提出物 50%		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	50			
	その他	0			
履修上の留意事項	①授業は PC 室で行うので時間までに着席していること。②説明と実習（実習がメイン）③積み重ねの演習が多いので休まずに出席すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	情報処理の基礎（序章、第 1 章）	Windows とインターネットの基礎（SNS の安全な利用、著作権、情報セキュア、校内ネットワークの使い方）、文字入力とタイピングの基礎		
	2	文書化の基本（第 2 章 1～2）	印刷様式、文字装飾		
	3	文書化の基本（第 2 章 3～4）	作表 1、画像・図形の利用 1		
	4	文書化の基本（第 2 章 5～6）	作表 2、画像・図形の利用 2		
	5	文書化の基本	練習問題、レポート作成		
	6	表計算ソフトの活用（第 3 章 1～3）	データ入力とワークシートの編集		
	7	表計算ソフトの活用（第 3 章 3～4）	四則演算と関数の基礎、作表と編集		
	8	表計算ソフトの活用（第 3 章 6）	グラフ表現の要点とグラフ作成		
	9	表計算ソフトの活用（第 3 章 5）	条件判定と順位付け		
	10	表計算ソフトの活用	練習問題、ファイル管理		
	11	プレゼンテーションソフトの活用（第 4 章 1～2）	スライド編集、文字装飾と図形の活用		
	12	プレゼンテーションソフトの活用（第 4 章 3～4）	特殊効果（グラフ、スマートアートの活用、アニメーション効果）		
	13	プレゼンテーションソフトの活用（第 4 章 5～6）	表・ワードアートの挿入、テーマの設定		
	14	プレゼンテーションソフトの活用（第 4 章 7）	資料作成とプレゼンテーションの基礎知識		
	15	プレゼンテーションソフトの活用	総合演習、プレゼンテーション		

[illegible]

授業科目	情報科学ⅠB		担当教員	赤尾 みどり	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	この授業は、本校における学習に必要な、情報リテラシーと Microsoft Word、Excel、PowerPoint の操作方法を身につけることを目的とする。また、それらを利用して、パソコンを有効活用するための知識と操作法を習得する。				
到達目標	①Word を使ってレポートが作成できる。 ②Excel を使って表や図が作成できる。 ③PowerPoint を使ってスライドが作成できる。 ④情報化社会でのモラルや責任について、自己の考え方を説明できる。				
テキスト・参考図書等	30 時間アカデミック 情報リテラシー Office2016 Windows 10 対応				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	・各試験の平均点 50% ・提出物 50%		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	50			
	その他	0			
履修上の留意事項	①授業は PC 室で行うので時間までに着席していること。②説明と実習（実習がメイン）③積み重ねの演習が多いので休まずに出席すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	情報処理の基礎（序章、第 1 章）	Windows とインターネットの基礎（SNS の安全な利用、著作権、情報セキュア、校内ネットワークの使い方）、文字入力とタイピングの基礎		
	2	文書化の基本（第 2 章 1～2）	印刷様式、文字装飾		
	3	文書化の基本（第 2 章 3～4）	作表 1、画像・図形の利用 1		
	4	文書化の基本（第 2 章 5～6）	作表 2、画像・図形の利用 2		
	5	文書化の基本	練習問題、レポート作成		
	6	表計算ソフトの活用（第 3 章 1～3）	データ入力とワークシートの編集		
	7	表計算ソフトの活用（第 3 章 3～4）	四則演算と関数の基礎、作表と編集		
	8	表計算ソフトの活用（第 3 章 6）	グラフ表現の要点とグラフ作成		
	9	表計算ソフトの活用（第 3 章 5）	条件判定と順位付け		
	10	表計算ソフトの活用	練習問題、ファイル管理		
	11	プレゼンテーションソフトの活用（第 4 章 1～2）	スライド編集、文字装飾と図形の活用		
	12	プレゼンテーションソフトの活用（第 4 章 3～4）	特殊効果（グラフ、スマートアートの活用、アニメーション効果）		
	13	プレゼンテーションソフトの活用（第 4 章 5～6）	表・ワードアートの挿入、テーマの設定		
	14	プレゼンテーションソフトの活用（第 4 章 7）	資料作成とプレゼンテーションの基礎知識		
	15	プレゼンテーションソフトの活用	総合演習、プレゼンテーション		

[illegible]

授業科目	心理学 A		担当教員	久原 奈緒子	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必須	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	心理学はどのような学問か、歴史と研究方法、また、環境へ適用していく上で心はどのように役立っているのか、心の仕組みはどのようにになっているのかについて、幅広い心理学の中から代表的なものについて学んでいきます。				
到達目標	心理学の基礎知識、心理学の分類や歴史、脳の働きと心の関係について理解した上で、感覚・知覚・記憶・思考・学習・言語・発達・性格を取り上げ、様々な分野への心理学の応用、人間一般の行動の法則性を修得することを目的とします。				
テキスト・参考図書等	教科書 社会福祉士シリーズ 2 心理学理論と心理的支援（ISBN978－4－335－61072－1）				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験 80%、提出物 20%にて評価します。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
	その他	0			
履修上の留意事項	必ずしも教科書に従って講義を進めるとは限りませんが、事前に一読下さい。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	心理学とは？	心理学の発祥、心理学の領域、他の学問との関連		
	2	性格心理学①	類型論、特性論、構造論、局所論		
	3	性格心理学②	性格の形成要因		
	4	性格心理学③	心理検査、交流分析		
	5	心の病理と健康①	心の健康と発達（フロイト、ユング、ピアジェ）		
	6	心の病理と健康②	防衛機制、愛着		
	7	知覚心理学①	感情と情動、表情と情動、弾力性感覚器官、知覚特性		
	8	知覚心理学②	人間のものの見方、見え方、感じ方		
	9	発達臨床心理学①	胎児期、乳児期の発達の特徴		
	10	発達臨床心理学②	児童期、学童期の発達の特徴		
	11	発達臨床心理学③	思春期、青年期の発達の特徴		
	12	発達臨床心理学④	中年期、老年期の発達の特徴		
	13	学習心理学①	レスポナデント条件付け、オペラント条件付け、動機づけ、		
	14	学習心理学②	学習無力感、欲求階層説、IQ		
15	グループワークとまとめ	KJ 法			

[illegible]

授業科目	心理学 B		担当教員	久原 奈緒子	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必須	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	心理学はどのような学問か、歴史と研究方法、また、環境へ適用していく上で心はどのように役立っているのか、心の仕組みはどのようなになっているのかについて、幅広い心理学の中から代表的なものについて学んでいきます。				
到達目標	心理学の基礎知識、心理学の分類や歴史、脳の働きと心の関係について理解した上で、感覚・知覚・記憶・思考・学習・言語・発達・性格を取り上げ、様々な分野への心理学の応用、人間一般の行動の法則性を修得することを目的とします。				
テキスト・参考図書等	教科書 社会福祉士シリーズ 2 心理学理論と心理的支援 (ISBN978-4-335-61072-1)				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験 80%、提出物 20%にて評価します。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
	その他	0			
履修上の留意事項	必ずしも教科書に従って講義を進めるとは限りませんが、事前に一読下さい。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	心理学とは？	心理学の発祥、心理学の領域、他の学問との関連		
	2	性格心理学①	類型論、特性論、構造論、局所論		
	3	性格心理学②	性格の形成要因		
	4	性格心理学③	心理検査、交流分析		
	5	心の病理と健康①	心の健康と発達（フロイト、ユング、ピアジェ）		
	6	心の病理と健康②	防衛機制、愛着		
	7	知覚心理学①	感情と情動、表情と情動、弾性感覚器官、知覚特性		
	8	知覚心理学②	人間のものの見方、見え方、感じ方		
	9	発達臨床心理学①	胎児期、乳児期の発達の特徴		
	10	発達臨床心理学②	児童期、学童期の発達の特徴		
	11	発達臨床心理学③	思春期、青年期の発達の特徴		
	12	発達臨床心理学④	中年期、老年期の発達の特徴		
	13	学習心理学①	レスポナデント条件付け、オペラント条件付け、動機づけ、		
	14	学習心理学②	学習無力感、欲求階層説、IQ		
15	グループワークとまとめ	KJ 法			

授業科目	心理学 B	担当 教員 実務 経験	久原奈緒子 有：■ 無：□	道内スクールカウンセラーとして 10 年の実務経験あり
対象年次・学期	1 年 ・ 前期	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	人間発達学 A		担当教員	高橋 義信	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	人間の身体や運動、認知がどのように発達するのか理解する。				
到達目標	新生児期から老年期までの各ライフステージの特徴とどのような問題に遭遇するかを理解し、問題を抱えた個人の援助の基礎を会得する。				
テキスト・参考図書等	リハビリテーション医学講座 第2巻 人間発達学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	人間の身体や運動、認知がどのように発達するのかについて理解することは、人間理解の基本となり、対人援助職には必要不可欠な知識となる。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	人間発達とは	人間発達観の変遷と発達研究法		
	2	発達の一般原理	発達の方向性、臨界期、遺伝率		
	3	身体発達Ⅰ	身体各部の発達の特徴		
	4	身体発達Ⅱ	身体発達の評価法、身体発達に関与する因子		
	5	運動機能の発達Ⅰ	新生児、乳児期の運動発達の特徴		
	6	運動機能の発達Ⅱ	運動機能の発達に影響を及ぼす因子		
	7	感覚の発達	新生児の感覚能力		
	8	知覚の発達	パターン知覚、奥行き知覚、色の知覚の発達		
	9	言語の発達	二歳までの言語発達の道筋、言語障害の原因		
	10	知能の発達	知能検査、知能指数、知能に影響を与える因子		
	11	青年期Ⅰ	青年期の身体的変化		
	12	青年期Ⅱ	青年期の心理的变化と諸問題		
	13	成人期	成人期の身体的変化と成人期の諸問題		
	14	老年期	老化とは、老化に影響を与える因子、老年期の諸問題		
	15	まとめ			

[illegible]

授業科目	人間発達学 B		担当教員	高橋 義信	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	人間の身体や運動、認知がどのように発達するのか理解する。				
到達目標	新生児期から老年期までの各ライフステージの特徴とどのような問題に遭遇するかを理解し、問題を抱えた個人の援助の基礎を会得する。				
テキスト・参考図書等	リハビリテーション医学講座 第2巻 人間発達学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	人間の身体や運動、認知がどのように発達するのかについて理解することは、人間理解の基本となり、対人援助職には必要不可欠な知識となる。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	人間発達とは	人間発達観の変遷と発達研究法		
	2	発達の一般原理	発達の方向性、臨界期、遺伝率		
	3	身体発達Ⅰ	身体各部の発達の特徴		
	4	身体発達Ⅱ	身体発達の評価法、身体発達に関与する因子		
	5	運動機能の発達Ⅰ	新生児、乳児期の運動発達の特徴		
	6	運動機能の発達Ⅱ	運動機能の発達に影響を及ぼす因子		
	7	感覚の発達	新生児の感覚能力		
	8	知覚の発達	パターン知覚、奥行き知覚、色の知覚の発達		
	9	言語の発達	二歳までの言語発達の道筋、言語障害の原因		
	10	知能の発達	知能検査、知能指数、知能に影響を与える因子		
	11	青年期Ⅰ	青年期の身体的変化		
	12	青年期Ⅱ	青年期の心理的变化と諸問題		
	13	成人期	成人期の身体的変化と成人期の諸問題		
	14	老年期	老化とは、老化に影響を与える因子、老年期の諸問題		
	15	まとめ			

[illegible]

授業科目	人財育成概説 A		担当教員	柿崎 貴浩	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態	講義		授業回数	8 回	時間数
授業目的	・ 本校学生としての基本的な心構えを知る。 ・ 医療人に必要とされる資質とは何かを諸先輩から話を聞き知る。				
到達目標	・ 社会人として必要な常識や心構え、人間関係を築くための意志伝達スキルを理解する。				
テキスト・参考図書等	配布資料				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	レポート課題により評価する。		
	レポート	100			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	卒後のイメージを具体化できるよう主体的な姿勢で受講すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション いま社会（病院・施設）が求めているもの	本校の教育理念、豊かな人間性について		
	2	どのような大人になりたいか			
	3	時代の変化と社会が求めている人財			
	4	キャリアデザインを描く			
	5	人財育成概説			
	6	フィジカル・フィットネス			
	7	医療職が求める学生とは			
8	社会人・医療人として大切にすべきこと				

授業科目	人財育成概説 A	担当 教員 実務 経験	柿崎貴浩 有：■ 無：□	市内精神科デイケアに 10 年、精神科病院に 1 年、老健施設に 1 年勤務
対象年次・学期	1 年・前期	担当 教員	渡邊匠	市内総合病院にて理学療法士として勤務。現在は株式会社 SHARE で地域共創部長・人財開発部長を務める
授業形態	講義	実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	伊藤隆 有：■ 無：□	内医療法人グループ、リハビリテーション統括部長として 20 年以上勤務。作業療法士
		担当 教員 実務 経験	渡邊祐美子 有：■ 無：□	学校法人吉田学園学園長
		担当 教員 実務 経験	大森達也 有：■ 無：□	市内・道内の整形外科病院で理学療法士として 10 年以上、本校理学療法学科教員として 3 年勤務。スポーツクラブ代表取締役社長に從事
		担当 教員 実務 経験	森山さら 有：■ 無：□	キャリアコンサルティング会社勤務。道内の大学等で各種就職ガイダンス・講演に從事
		担当 教員 実務 経験	吉田浩晃 有：■ 無：□	吉田学園総合事務局長として人事採用や職員のマネジメントに從事。理学療法士
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	人財育成概説 B	担当教員	柿崎 貴浩		
対象年次・学期	1 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態	講義	授業回数	8 回	時間数	15 時間
授業目的	・ 本校学生としての基本的な心構えを知る。 ・ 医療人に必要とされる資質とは何かを諸先輩から話を聞き知る。				
到達目標	・ 社会人として必要な常識や心構え、人間関係を築くための意志伝達スキルを理解する。				
テキスト・参考図書等	配布資料				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	レポート課題により評価する。		
	レポート	100			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・ 緊張することなく真摯な姿勢で聞く。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション いま社会（病院・施設）が求めているもの	本校の教育理念、豊かな人間性について		
	2	どんな大人になりたいか			
	3	時代の変化と社会が求めている人財			
	4	キャリアデザインを描く			
	5	人財育成概説			
	6	フィジカルフィットネス			
	7	医療職が求める学生とは			
	8	社会人・医療人として大切にすべきこと			

授業科目	人財育成概説 B	担当 教員 実務 経験	柿崎貴浩 有：■ 無：□	市内精神科デイケアに 10 年、精神科病院に 1 年、老健施設に 1 年勤務
対象年次・学期	1 年・前期	担当 教員	渡邊匠	市内総合病院にて理学療法士として勤務。現在は株式会社 SHARE で地域共創部長・人財開発部長を務める
授業形態	講義	実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	伊藤隆 有：■ 無：□	市内病院にて作業療法士として 20 年以上勤務
		担当 教員 実務 経験	渡邊祐美子 有：■ 無：□	学校法人吉田学園学園長
		担当 教員 実務 経験	大森達也 有：■ 無：□	市内・道内の整形外科病院で理学療法士として 10 年以上、本校理学療法学科教員として 3 年勤務。スポーツクラブ代表取締役社長に從事
		担当 教員 実務 経験	森山さら 有：■ 無：□	キャリアコンサルティング会社勤務。道内の大学等で各種就職ガイダンス・講演に從事
		担当 教員 実務 経験	吉田浩晃 有：■ 無：□	吉田学園総合事務局長として人事採用や職員のマネジメントに從事。理学療法士
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	生理学 A		担当教員	中嶋 俊雄	
対象年次・学期	1 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	45 回	時間数 90 時間
授業目的	・人間が生きていくための仕組み「生理学」は、リハビリを学ぶための基礎として極めて重要である。「この仕組みはどのようにすれば回復させることが出来るのだろうか」と考えながら、しっかり学ぶことを目的とする。				
到達目標	・生体におけるホメオスタシスの基本概念および呼吸器・循環器・消化器・生殖器・代謝・内分泌の機能を理解する。 ・神経系は電気信号を用いて情報を伝える。このしくみを学び生体の内外の感覚情報の解析と生体が外界に働きかける運動や行動を理解する。				
テキスト・参考図書等	生理学（標準理学療法作業療法学 専門基礎分野）第 6 版 これならわかる要点生理学 参考書籍：解剖生理学、目で見るからだのメカニズム、生理学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	筆記試験は前期分（中間試験、前期試験）と後期試験それぞれに合格すること。 ・前期：中間試験＋前期試験 ＝ 120 点以上合格(120 点未満再試験) ・後期：後期試験 ＝ 60 点以上合格（60 点未満再試験） ・再試験は 60 点以上で合格となる		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・1 回ごとの積み重ねが大事であるので必ず出席して集中して講義を聞くこと。 ・単なる丸暗記では、臨床においては通用しない。「仕組み」「機序」「作用」を理解するよう心掛けること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	生命現象と人体	オリエンテーション、身体の階層性 生命現象 水 ホメオスタシス		
	2	生命現象と人体	オリエンテーション、身体の階層性 生命現象 水 ホメオスタシス		
	3	生命現象と人体	オリエンテーション、身体の階層性 生命現象 水 ホメオスタシス		
	4	細胞の構造と機能	細胞 体液 細胞の透過性 静止電位 活動電位		
	5	細胞の構造と機能	細胞 体液 細胞の透過性 静止電位 活動電位		

6	細胞の構造と機能	細胞 体液 細胞の透過性 静止電位 活動電位
7	血液	血液の機能と成分、血球、血漿 生体防御、免疫 骨と骨髄
8	血液	血液の機能と成分、血球、血漿 生体防御、免疫 骨と骨髄
9	血液	血液の機能と成分、血球、血漿 生体防御、免疫 骨と骨髄
10	血液	血液の機能と成分、血球、血漿 生体防御、免疫 骨と骨髄
11	心臓と循環	循環の仕組み、心臓・心機能の調節 心電図、心音、心周期
12	心臓と循環	循環の仕組み、心臓・心機能の調節 心電図、心音、心周期
13	心臓と循環	循環の仕組み、心臓・心機能の調節 心電図、心音、心周期
14	呼吸とガスの運搬	呼吸器、呼吸運動、肺気量 呼吸ガスと血流ガス 呼吸の調節
15	呼吸とガスの運搬	呼吸器、呼吸運動、肺気量 呼吸ガスと血流ガス 呼吸の調節
16	消化と吸収	消化器の機能、消化機能の調節
17	消化と吸収	消化器の機能、消化機能の調節
18	尿の生成と排泄	排泄、腎臓、尿の生成 腎機能の調節、排尿
19	尿の生成と排泄	排泄、腎臓、尿の生成 腎機能の調節、排尿
20	内分泌	ホルモンとは、視床下部－下垂体系、甲状腺 上皮小体、睪臓等
21	内分泌	ホルモンとは、視床下部－下垂体系、甲状腺 上皮小体、睪臓等
22	性と生殖	生殖器、受精と妊娠
23	中枢神経系	中枢神経系の構成、機能 記憶、脳波
24	中枢神経系	中枢神経系の構成、機能 記憶、脳波
25	中枢神経系	中枢神経系の構成、機能 記憶、脳波
26	中枢神経系	中枢神経系の構成、機能 記憶、脳波
27	代謝と体温	エネルギー代謝、栄養素の代謝 体温、発汗
28	代謝と体温	エネルギー代謝、栄養素の代謝 体温、発汗
29	酸塩基平衡	体液の pH、血液の緩衝系、酸－塩基平衡の異常
30	酸塩基平衡	体液の pH、血液の緩衝系、酸－塩基平衡の異常
31	神経Ⅰ	神経入門・興奮の成り立ち
32	神経Ⅱ	興奮の伝導と伝達
33	神経系	シナプスと神経系
34	末梢神経系	脳神経、脊髄神経、自律神経の機能
35	中枢神経系Ⅰ	脊髄の機能
36	中枢神経系Ⅱ	脳幹各部位の機能
37	中枢神経系Ⅲ	随意運動の調節
38	中枢神経系Ⅳ	大脳皮質の機能
39	感覚Ⅰ	感覚入門・受容器の性質
40	感覚Ⅱ	感覚各論
41	筋の収縮	筋肉入門・筋収縮の生理学
42	筋の収縮	骨格筋の張力
43	筋の収縮	骨格筋収縮のエネルギー
44	筋の収縮	固有感覚と筋電図
45	筋の収縮	心筋と平滑筋

授業科目	生理学 A	担当 教員 実務 経験	一瀬信敏 有：■ 無：□	博士号(地球環境科学)を有し、市内医科大学生理学講座にて10年以上教育に従事
対象年次・学期	1年・通年	担当 教員	吉田香織 有：■ 無：□	道内の総合病院に理学療法士として10年以上勤務
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験	目黒文彦 有：■ 無：□	道内医療機関にて作業療法士として14年勤務
		担当 教員 実務 経験	横野裕行 有：■ 無：□	道内・外の病院で理学療法士として8年勤務
		担当 教員 実務 経験	竹中謙将 有：■ 無：□	道内の病院で10年、老人保健施設で5年、理学療法士として勤務
		担当 教員 実務 経験	和田英峰 有：■ 無：□	道内病院にて作業療法士として8年勤務
		担当 教員 実務 経験	有本邦洋 有：■ 無：□	道外医療施設にて理学療法士として6年間勤務
		担当 教員 実務 経験	青戸恵利伽 有：■ 無：□	市内病院において5年以上作業療法士として勤務
		担当 教員 実務 経験	武田祐貴 有：■ 無：□	市内脳神経外科病院にて理学療法士として12年間勤務
		担当 教員 実務 経験	山田里見 有：■ 無：□	道内病院にて作業療法士として6年勤務
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	生理学 B		担当教員	中嶋 俊雄	
対象年次・学期	1 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	45 回	時間数 90 時間
授業目的	・人間が生きていくための仕組み「生理学」は、リハビリを学ぶための基礎として極めて重要である。「この仕組みはどのようにすれば回復させることが出来るのだろうか」と考えながら、しっかり学ぶことを目的とする。				
到達目標	・生体におけるホメオスタシスの基本概念および呼吸器・循環器・消化器・生殖器・代謝・内分泌の機能を理解する。 ・神経系は電気信号を用いて情報を伝える。このしくみを学び生体の内外の感覚情報の解析と生体が外界に働きかける運動や行動を理解する。				
テキスト・参考図書等	生理学（標準理学療法作業療法学 専門基礎分野）第 6 版 これならわかる要点生理学 参考書籍：解剖生理学、目で見るからだのメカニズム、生理学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	筆記試験は前期分（中間試験、前期試験）と後期試験それぞれに合格すること。 ・前期：中間試験＋前期試験 ＝ 120 点以上合格(120 点未満再試験) ・後期：後期試験 ＝ 60 点以上合格（60 点未満再試験） ・再試験は 60 点以上で合格となる		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・1 回ごとの積み重ねが大事であるので必ず出席して集中して講義を聞くこと。 ・単なる丸暗記では、臨床においては通用しない。「仕組み」「機序」「作用」を理解するよう心掛けること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	生命現象と人体	オリエンテーション、身体の階層性 生命現象 水 ホメオスタシス		
	2	生命現象と人体	オリエンテーション、身体の階層性 生命現象 水 ホメオスタシス		
	3	生命現象と人体	オリエンテーション、身体の階層性 生命現象 水 ホメオスタシス		
	4	細胞の構造と機能	細胞 体液 細胞の透過性 静止電位 活動電位		
	5	細胞の構造と機能	細胞 体液 細胞の透過性 静止電位 活動電位		

6	細胞の構造と機能	細胞 体液 細胞の透過性 静止電位 活動電位
7	血液	血液の機能と成分、血球、血漿 生体防御、免疫 骨と骨髄
8	血液	血液の機能と成分、血球、血漿 生体防御、免疫 骨と骨髄
9	血液	血液の機能と成分、血球、血漿 生体防御、免疫 骨と骨髄
10	血液	血液の機能と成分、血球、血漿 生体防御、免疫 骨と骨髄
11	心臓と循環	循環の仕組み、心臓・心機能の調節 心電図、心音、心周期
12	心臓と循環	循環の仕組み、心臓・心機能の調節 心電図、心音、心周期
13	心臓と循環	循環の仕組み、心臓・心機能の調節 心電図、心音、心周期
14	呼吸とガスの運搬	呼吸器、呼吸運動、肺気量 呼吸ガスと血流ガス 呼吸の調節
15	呼吸とガスの運搬	呼吸器、呼吸運動、肺気量 呼吸ガスと血流ガス 呼吸の調節
16	消化と吸収	消化器の機能、消化機能の調節
17	消化と吸収	消化器の機能、消化機能の調節
18	尿の生成と排泄	排泄、腎臓、尿の生成 腎機能の調節、排尿
19	尿の生成と排泄	排泄、腎臓、尿の生成 腎機能の調節、排尿
20	内分泌	ホルモンとは、視床下部－下垂体系、甲状腺 上皮小体、睪臓等
21	内分泌	ホルモンとは、視床下部－下垂体系、甲状腺 上皮小体、睪臓等
22	性と生殖	生殖器、受精と妊娠
23	中枢神経系	中枢神経系の構成、機能 記憶、脳波
24	中枢神経系	中枢神経系の構成、機能 記憶、脳波
25	中枢神経系	中枢神経系の構成、機能 記憶、脳波
26	中枢神経系	中枢神経系の構成、機能 記憶、脳波
27	代謝と体温	エネルギー代謝、栄養素の代謝 体温、発汗
28	代謝と体温	エネルギー代謝、栄養素の代謝 体温、発汗
29	酸塩基平衡	体液の pH、血液の緩衝系、酸－塩基平衡の異常
30	酸塩基平衡	体液の pH、血液の緩衝系、酸－塩基平衡の異常
31	神経Ⅰ	神経入門・興奮の成り立ち
32	神経Ⅱ	興奮の伝導と伝達
33	神経系	シナプスと神経系
34	末梢神経系	脳神経、脊髄神経、自律神経の機能
35	中枢神経系Ⅰ	脊髄の機能
36	中枢神経系Ⅱ	脳幹各部位の機能
37	中枢神経系Ⅲ	随意運動の調節
38	中枢神経系Ⅳ	大脳皮質の機能
39	感覚Ⅰ	感覚入門・受容器の性質
40	感覚Ⅱ	感覚各論
41	筋の収縮	筋肉入門・筋収縮の生理学
42	筋の収縮	骨格筋の張力
43	筋の収縮	骨格筋収縮のエネルギー
44	筋の収縮	固有感覚と筋電図
45	筋の収縮	心筋と平滑筋

授業科目	生理学 B	担当 教員 実務 経験	一瀬信敏 有：■ 無：□	博士号(地球環境科学)を有し、市内医科大学生理学講座にて10年以上教育に従事
対象年次・学期	1年・通年	担当 教員	吉田香織 有：■ 無：□	道内の総合病院に理学療法士として10年以上勤務
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験	目黒文彦 有：■ 無：□	道内医療機関にて作業療法士として14年勤務
		担当 教員 実務 経験	横野裕行 有：■ 無：□	道内・外の病院で理学療法士として8年勤務
		担当 教員 実務 経験	竹中謙将 有：■ 無：□	道内の病院で10年、老人保健施設で5年、理学療法士として勤務
		担当 教員 実務 経験	和田英峰 有：■ 無：□	道内病院にて作業療法士として8年勤務
		担当 教員 実務 経験	有本邦洋 有：■ 無：□	道外医療施設にて理学療法士として6年間勤務
		担当 教員 実務 経験	青戸恵利伽 有：■ 無：□	市内病院において5年以上作業療法士として勤務
		担当 教員 実務 経験	武田祐貴 有：■ 無：□	市内脳神経外科病院にて理学療法士として12年間勤務
		担当 教員 実務 経験	山田里見 有：■ 無：□	道内病院にて作業療法士として6年勤務
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	生理学実習 A		担当教員	武田 祐貴	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数 45 時間
授業目的	・生理学の講義で得られた知識を、実習を通してより深く理解する。・実習器具や実験装置の取り扱いを知るとともに、できる限り詳細な記録、鋭察を心掛け、より深い分析力、考察力を身に付ける。・実験の一連の過程（目的、方法、結果、考察）について、標準的な書式に則って記載する能力を養う。				
到達目標	①生理学の知識を基に、実習を行い、その結果を分析・考察することができる。 ②実習で得られた結果を書式に則って適切に記録・記載をすることができる。				
テキスト・参考図書等	生理学（標準理学療法作業療法学 専門基礎分野）第 5 版 これならわかる要点生理学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	各実習の課題点（20%）とレポート評価点（80%）により評価。		
	レポート	80			
	小テスト	0			
	提出物	20			
	その他	0			
履修上の留意事項	レポートでは「実習内容を正確に詳細に記述する」、「文献の丸写しではなく、自らの考えを交えて書く」ことを心掛けること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	実習の目的・進め方、レポートの書き方、実験結果のまとめ方、文献の調べ方、内容要約について、考察の書き方（担当：小熊、武田、小野）		
	2	オリエンテーション	実習の目的・進め方、レポートの書き方、実験結果のまとめ方、文献の調べ方、内容要約について、考察の書き方（担当：小熊、武田、小野）		
	3	オリエンテーション	実習の目的・進め方、レポートの書き方、実験結果のまとめ方、文献の調べ方、内容要約について、考察の書き方（担当：小熊、武田、小野）		
	4	オリエンテーション	実習の目的・進め方、レポートの書き方、実験結果のまとめ方、文献の調べ方、内容要約について、考察の書き方（担当：小熊、武田、小野）		
	5	オリエンテーション	実習の目的・進め方、レポートの書き方、実験結果のまとめ方、文献の調べ方、内容要約について、考察の書き方（担当：小熊、武田、小野）		
	6	実習	筋力測定		
	7	実習	筋力測定		
	8	実習	皮膚感覚		
	9	実習	皮膚感覚		
	10	実習	皮膚感覚		
	11	実習	皮膚感覚		
	12	実習	心電図		
	13	実習	心電図		
	14	実習	心電図		
	15	実習	心電図		
	16	実習	筋電図		
	17	実習	筋電図		
	18	実習	筋電図		

	19	実習	筋電図
	20	実習	呼吸機能
	21	実習	呼吸機能
	22	実習	呼吸機能
	23	実習	呼吸機能

授業科目	生理学実習 A	担当 教員 実務 経験	武田祐貴 有：■ 無：□	市内脳神経外科病院にて理学療法士として 12 年間勤務
対象年次・学期	1 年・後期	担当 教員	小熊真喜子	道内精神科病院にて作業療法士として勤務
授業形態		実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	竹中謙将 有：■ 無：□	道内の病院で 10 年、老人保健施設で 5 年、理学療法士として勤務
		担当 教員 実務 経験	和田英峰 有：■ 無：□	道内病院にて作業療法士として 8 年勤務
		担当 教員 実務 経験	元木純 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として 18 年間勤務
		担当 教員 実務 経験	横野裕行 有：■ 無：□	道内・外の病院で理学療法士として 8 年勤務
		担当 教員 実務 経験	青戸恵利伽 有：■ 無：□	道内病院・介護保険施設において作業療法士として 5 年勤務
		担当 教員 実務 経験	池田保 有：■ 無：□	道内の病院にて作業療法士として 10 年勤務
		担当 教員 実務 経験	小野直也 有：■ 無：□	市内回復期病院にて 5 年間勤務
		担当 教員 実務 経験	吉田智子 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として 10 年以上勤務
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	生理学実習 B		担当教員	武田 祐貴	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数
授業目的	・生理学の講義で得られた知識を、実習を通してより深く理解する。・実習器具や実験装置の取り扱いを知るとともに、できる限り詳細な記録、鋭察を心掛け、より深い分析力、考察力を身に付ける。・実験の一連の過程（目的、方法、結果、考察）について、標準的な書式に則って記載する能力を養う。				
到達目標	①生理学の知識を基に、実習を行い、その結果を分析・考察することができる。 ②実習で得られた結果を書式に則って適切に記録・記載をすることができる。				
テキスト・参考図書等	生理学（標準理学療法作業療法学 専門基礎分野）第 5 版 これならわかる要点生理学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	各実習の課題点（20%）とレポート評価点（80%）により評価。		
	レポート	80			
	小テスト	0			
	提出物	20			
	その他	0			
履修上の留意事項	レポートでは「実習内容を正確に詳細に記述する」、「文献の丸写しではなく、自らの考えを交えて書く」ことを心掛けること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	実習の目的・進め方、レポートの書き方、実験結果のまとめ方、文献の調べ方、内容要約について、考察の書き方 （担当：小熊、武田、小野）		
	2	オリエンテーション	実習の目的・進め方、レポートの書き方、実験結果のまとめ方、文献の調べ方、内容要約について、考察の書き方 （担当：小熊、武田、小野）		
	3	オリエンテーション	実習の目的・進め方、レポートの書き方、実験結果のまとめ方、文献の調べ方、内容要約について、考察の書き方 （担当：小熊、武田、小野）		
	4	オリエンテーション	実習の目的・進め方、レポートの書き方、実験結果のまとめ方、文献の調べ方、内容要約について、考察の書き方 （担当：小熊、武田、小野）		
	5	オリエンテーション	実習の目的・進め方、レポートの書き方、実験結果のまとめ方、文献の調べ方、内容要約について、考察の書き方 （担当：小熊、武田、小野）		
	6	実習	筋力測定		
	7	実習	筋力測定		
	8	実習	皮膚感覚		
	9	実習	皮膚感覚		
	10	実習	皮膚感覚		
	11	実習	皮膚感覚		
	12	実習	心電図		
	13	実習	心電図		
	14	実習	心電図		
	15	実習	心電図		
	16	実習	筋電図		
	17	実習	筋電図		
	18	実習	筋電図		

	19	実習	筋電図
	20	実習	呼吸機能
	21	実習	呼吸機能
	22	実習	呼吸機能
	23	実習	呼吸機能

授業科目	生理学実習 B	担当 教員 実務 経験	武田祐貴 有：■ 無：□	市内脳神経外科病院にて理学療法士として 12 年間勤務
対象年次・学期	1 年・後期	担当 教員	小熊真喜子	道内精神科病院にて作業療法士として勤務
授業形態		実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	竹中謙将 有：■ 無：□	道内の病院で 10 年、老人保健施設で 5 年、理学療法士として勤務
		担当 教員 実務 経験	和田英峰 有：■ 無：□	道内病院にて作業療法士として 8 年勤務
		担当 教員 実務 経験	元木純 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として 18 年間勤務
		担当 教員 実務 経験	横野裕行 有：■ 無：□	道内・外の病院で理学療法士として 8 年勤務
		担当 教員 実務 経験	青戸恵利伽 有：■ 無：□	道内病院・介護保険施設において作業療法士として 5 年勤務
		担当 教員 実務 経験	池田保 有：■ 無：□	道内の病院にて作業療法士として 10 年勤務
		担当 教員 実務 経験	小野直也 有：■ 無：□	市内回復期病院にて 5 年間勤務
		担当 教員 実務 経験	吉田智子 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として 10 年以上勤務
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	哲学 A		担当教員	尾形 敬次	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	医療者は医療技術者である一方、医療技術の開発者、つまり医学の研究者でもある。無論、この研究は科学一般のパラダイムに従って、つまり科学研究の前提となる態度と方法に従って行われなければならない。また、一般に科学理論に従うことが、誤った治療方法に陥らないための条件でもある。見方を変えると、これに従わなかったため治療成果が挙げられない場合、医療者に弁明の余地はなく、医療者個人が責任を取らなければならない。上のような背景事情を前提にしつつ、講義という形態の中に随時演習を取り入れ、それによって学生が科学の理解を深め、その思考態度を確立するのがこの講義の目的・目標である。				
到達目標	科学的思考態度の習得は中等教育の目標でもあり、そこにおける学生の習熟度に応じて講義の中での演習を行う。したがって授業は随時提出される演習課題への学生の解答をフィードバックさせて行われる。この講義は科学哲学の講義であり、学生が科学者としての態度を身につけることを目標とする。つまり、知識の蓄積ではなく、知識を作り出すための態度の形成が目標である。				
テキスト・参考図書等	特に指定なし				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	授業時間内に行う問いの解答の成績と、学期末の筆記試験を総合して評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	50			
	その他	0			
履修上の留意事項	知識の集積ではなく、むしろ態度の習得が目標なので、習得すべき個々の学習内容はあらかじめシラバスで提示できるが、時間ごとの講義内容を前もって明示することはできない。下のコマ数は目安に過ぎず、講義はおおむね以下の順序で行われるが、必要に応じて随時、テーマを遡ることがある。科学活動は職業上、自分たちに直接関与してくる。その自覚をもって授業に臨んでほしい。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	科学とは何か	西洋文化としての科学		
	2	科学と非科学	哲学と科学、宗教と科学、科学とエッセンス		
	3	近代科学の形成	科学革命と近代科学のパラダイム		
	4	近代科学の形成	科学革命と近代科学のパラダイム		
	5	近代科学のパラダイムと相容れない科学	19 世紀後半以降の科学の成果。無意識、進化、量子		
	6	科学的探究の方法	実験と観察、帰納と演繹、仮説演繹法と反証可能性		
	7	科学的探究の限界	神経ダーウィニズムとセンス・データの限界		
8	科学の新たなパラダイム	自己組織化、オートポイエーシス等の仮説			

[illegible]

授業科目	哲学 B		担当教員	尾形 敬次	
対象年次・学期	1 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数 15 時間
授業目的	医療者は医療技術者である一方、医療技術の開発者、つまり医学の研究者でもある。無論、この研究は科学一般のパラダイムに従って、つまり科学研究の前提となる態度と方法に従って行われなければならない。また、一般に科学理論に従うことが、誤った治療方法に陥らないための条件でもある。見方を変えると、これに従わなかったため治療成果が挙げられない場合、医療者に弁明の余地はなく、医療者個人が責任を取らなければならない。上のような背景事情を前提にしつつ、講義という形態の中に随時演習を取り入れ、それによって学生が科学の理解を深め、その思考態度を確立するのがこの講義の目的・目標である。				
到達目標	科学的思考態度の習得は中等教育の目標でもあり、そこにおける学生の習熟度に応じて講義の中での演習を行う。したがって授業は随時提出される演習課題への学生の解答をフィードバックさせて行われる。この講義は科学哲学の講義であり、学生が科学者としての態度を身につけることを目標とする。つまり、知識の蓄積ではなく、知識を作り出すための態度の形成が目標である。				
テキスト・参考図書等	特に指定なし				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	授業時間内に行う問いの解答の成績と、学期末の筆記試験を総合して評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	50			
	その他	0			
履修上の留意事項	知識の集積ではなく、むしろ態度の習得が目標なので、習得すべき個々の学習内容はあらかじめシラバスで提示できるが、時間ごとの講義内容を前もって明示することはできない。下のコマ数は目安に過ぎず、講義はおおむね以下の順序で行われるが、必要に応じて随時、テーマを遡ることがある。科学活動は職業上、自分たちに直接関与してくる。その自覚をもって授業に臨んでほしい。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	科学とは何か	西洋文化としての科学		
	2	科学と非科学	哲学と科学、宗教と科学、科学とエッセイ科学		
	3	近代科学の形成	科学革命と近代科学のパラダイム		
	4	近代科学の形成	科学革命と近代科学のパラダイム		
	5	近代科学のパラダイムと相容れない科学	19 世紀後半以降の科学の成果。無意識、進化、量子		
	6	科学的探究の方法	実験と観察、帰納と演繹、仮説演繹法と反証可能性		
	7	科学的探究の限界	神経ダーウィニズムとセンス・データの限界		
	8	科学の新たなパラダイム	自己組織化、オートポイエーシス等の仮説		

[illegible]

授業科目	日常生活活動ⅠA		担当教員	竹中 謙将	
対象年次・学期	1年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	授業を通して、日常生活活動の基本について理解する。さらに、自らの生活を鑑み、運動・動作・行為の観察を行い、基本的な介助技術を身に付ける。演習を通して、福祉用具や移動補助具を実際に使用して学習する。				
到達目標	①日常生活活動の意義・重要性を説明できること、②基本動作の介助方法を実施できること、③移動補助具の名称や使用方法を説明できること。				
テキスト・参考図書等	PT・OT ビジュアルテキスト ADL 姿勢と動作 第3版 ADL その基礎から応用				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	筆記試験において、100点満点中60点以上を合格とし、本試験で60点に満たないものは再試験にて60点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	演習時は動きやすい服装で受講すること。本科目の授業では暗記力よりも、応用力・想像力が重要となる。普段の生活で、どのような活動、動作がなされているかを常に意識するよう心がけること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション			
	2	1日の生活活動	1日の生活を分析する		
	3	ADLの概念	ADLとは何か学ぶ		
	4	姿勢と動作の概念	姿勢とは何か、動作とは何か学ぶ		
	5	姿勢と動作の概念	姿勢とは何か、動作とは何か学ぶ		
	6	基本の姿勢	基本の姿勢を学ぶ		
	7	基本の姿勢	基本の姿勢を学ぶ		
	8	起居動作の観察	起居動作を行い、観察する		
	9	起居動作の観察	起居動作を行い、観察する		
	10	身のまわり動作	様々な条件で身のまわり動作を実施する		
	11	身のまわり動作	様々な条件で身のまわり動作を実施する		
	12	基本動作の操作	基本動作を介助する方法を学ぶ		
	13	基本動作の操作	基本動作を介助する方法を学ぶ		
	14	歩行補助具・車椅子	杖・歩行器・歩行補助具・車椅子の種類、構造・使用法について学ぶ		
	15	歩行補助具・車椅子	杖・歩行器・歩行補助具・車椅子の種類、構造・使用法について学ぶ		

[illegible]

授業科目	日常生活活動ⅠB		担当教員	竹中 謙将	
対象年次・学期	1年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	授業を通して、日常生活活動の基本について理解する。さらに、自らの生活を鑑み、運動・動作・行為の観察を行い、基本的な介助技術を身に付ける。演習を通して、福祉用具や移動補助具を実際に使用して学習する。				
到達目標	①日常生活活動の意義・重要性を説明できること、②基本動作の介助方法を実施できること、③移動補助具の名称や使用方法を説明できること。				
テキスト・参考図書等	PT・OT ビジュアルテキスト ADL 姿勢と動作 第3版 ADL その基礎から応用				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	筆記試験において、100点満点中60点以上を合格とし、本試験で60点に満たないものは再試験にて60点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	演習時は動きやすい服装で受講すること。本科目の授業では暗記力よりも、応用力・想像力が重要となる。普段の生活で、どのような活動、動作がなされているかを常に意識するよう心がけること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション			
	2	1日の生活活動	1日の生活を分析する		
	3	ADLの概念	ADLとは何か学ぶ		
	4	姿勢と動作の概念	姿勢とは何か、動作とは何か学ぶ		
	5	姿勢と動作の概念	姿勢とは何か、動作とは何か学ぶ		
	6	基本の姿勢	基本の姿勢を学ぶ		
	7	基本の姿勢	基本の姿勢を学ぶ		
	8	起居動作の観察	起居動作を行い、観察する		
	9	起居動作の観察	起居動作を行い、観察する		
	10	身のまわり動作	様々な条件で身のまわり動作を実施する		
	11	身のまわり動作	様々な条件で身のまわり動作を実施する		
	12	基本動作の操作	基本動作を介助する方法を学ぶ		
	13	基本動作の操作	基本動作を介助する方法を学ぶ		
	14	歩行補助具・車椅子	杖・歩行器・歩行補助具・車椅子の種類、構造・使用法について学ぶ		
	15	歩行補助具・車椅子	杖・歩行器・歩行補助具・車椅子の種類、構造・使用法について学ぶ		

[illegible]

授業科目	表現論 A		担当教員	吉田 智子		
対象年次・学期	1 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態			授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	医療職を目指す学生が、専門科目の教科書や資料を「正確に読み解く」ための基礎体力を養い、実習レポートや国家試験の基礎となる「論理的なアウトプット」ができる土台を形成する。相手に伝えるためのプレゼンテーション技法を学ぶ。実習にむけた様々な課題の取り組み方法を知る。					
到達目標	教科書や資料から必要な情報を正確に抽出し、根拠に基づいた論理的なアウトプットができる。プレゼンテーションに必要な基本的事項について表現技法を習得する。臨床実習に向け、実習日誌・メモ・お礼状などの作成ポイントを列挙できる。					
テキスト・参考図書等	1～3 回目は「標準生理学」の教科書を使用します。					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	0	前期、後期ともに提出物の提出状況と内容にて評価する。 前期・後期の総合点をもって評定を決定する。			
	レポート	0				
	小テスト	0				
	提出物	100				
	その他	0				
履修上の留意事項						
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容			
	1	正確な情報収集と模写	索引、目次、序文の使い分けを学ぶ。「写す」作業が医療安全（ミス防止）に直結することを理解する。索引から用語を特定し、解剖学・生理学の専門用語を「ハネ・ハライ」まで正確に書き写す。			
	2	文構造の解体（主語・述語）	スラッシュ（／）で意味を区切る方法と、文末から逆算して主語を見つける「主述ペア」の法則を学ぶ。複雑な医療文章にスラッシュを入れ、主語を○、述語に下線を引く。核心を 20 字で要約する。			
	3	論理的関係の把握（接続詞）	代表的な接続詞の役割（だから、しかし、つまり等）を学ぶ。専門用語を日常語へ「言い換える」コツを理解する。適切な接続詞を選択して文を完成させる。難しい言葉を「つまり～」を使って中学生でもわかるように翻訳する。			
	4	数値データの言語化	グラフを見る際の「視線の順序」を学ぶ。変化を「急激に」「緩やかに」などの言葉で表現する手法を知る。バイタルサインの変化グラフから数値を読み取り、何が起きているかを文章で説明する。			
	5	事実と主観の区別（PREP 法）	事実（客観）と意見（主観）を仕分ける。説得力のある文章の型「PREP 法」を習得する。提示されたデータをもとに、PREP 法を用いて「意見文」を作成する。型をもとに「感想文」を作成する。			
	6	情報の統合と表出（総まとめ）	全 5 回のスキルの再確認。「主述のねじれ」などの陥りやすいミスの注意喚起。「学習・睡眠時間と成績の関係」を題材に、読解・分析・記述のすべてを行う。赤ペンで自分の読み解きのミスを修正し、6 回全体の成長を振り返る。			
	7	わかりやすい発表（1）	プレゼンテーションの方法、スライドと読み原稿の作成 情報収集と比較読み			
	8	わかりやすい発表（2）	スライドの作成と修正 発表や聴講のポイント			
	9	わかりやすい発表（3）	プレゼンテーションの実施 聴講体験 フィードバックを受ける			
	10	実習直前講座（1）口頭報告	書き言葉と話し言葉、挨拶の仕方や敬語の使い方について学ぶ。			
	11	実習直前講座（2） お礼	臨床実習の目的と学習の流れについて理解する。お礼状の			

		状	目的、書き方や内容について学ぶ。
	12	実習直前講座（3） 学生紹介書	学生紹介書の目的、書き方や内容について学ぶ。
	13	実習直前講座（4） メモ、パーソナルポートフォリオ	評価場面記録の書き方について学ぶ。パーソナルポートフォリオの書き方について学ぶ。
	14	実習直前講座（5） 評価場面記録	評価場面記録の書き方について学ぶ。
	15	実習直前講座（6） 実習日誌	実習日誌の書き方について学ぶ。SOAP について学ぶ。

[illegible]

授業科目	表現論 B		担当教員	吉田 智子		
対象年次・学期	1 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態			授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	医療職を目指す学生が、専門科目の教科書や資料を「正確に読み解く」ための基礎体力を養い、実習レポートや国家試験の基礎となる「論理的なアウトプット」ができる土台を形成する。相手に伝えるためのプレゼンテーション技法を学ぶ。実習にむけた様々な課題の取り組み方法を知る。					
到達目標	教科書や資料から必要な情報を正確に抽出し、根拠に基づいた論理的なアウトプットができる。プレゼンテーションに必要な基本的事項について表現技法を習得する。臨床実習に向け、実習日誌・メモ・お礼状などの作成ポイントを列挙できる。					
テキスト・参考図書等	1～3 回目は「標準生理学」の教科書を使用します。					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	0	前期、後期ともに提出物の提出状況と内容にて評価する。 前期・後期の総合点をもって評定を決定する。			
	レポート	0				
	小テスト	0				
	提出物	100				
	その他	0				
履修上の留意事項						
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容			
	1	正確な情報収集と模写	索引、目次、序文の使い分けを学ぶ。「写す」作業が医療安全（ミス防止）に直結することを理解する。索引から用語を特定し、解剖学・生理学の専門用語を「ハネ・ハライ」まで正確に書き写す。			
	2	文構造の解体（主語・述語）	スラッシュ（／）で意味を区切る方法と、文末から逆算して主語を見つける「主述ペア」の法則を学ぶ。複雑な医療文章にスラッシュを入れ、主語を○、述語に下線を引く。核心を 20 字で要約する。			
	3	論理的関係の把握（接続詞）	代表的な接続詞の役割（だから、しかし、つまり等）を学ぶ。専門用語を日常語へ「言い換える」コツを理解する。適切な接続詞を選択して文を完成させる。難しい言葉を「つまり～」を使って中学生でもわかるように翻訳する。			
	4	数値データの言語化	グラフを見る際の「視線の順序」を学ぶ。変化を「急激に」「緩やかに」などの言葉で表現する手法を知る。バイタルサインの変化グラフから数値を読み取り、何が起きているかを文章で説明する。			
	5	事実と主観の区別（PREP 法）	事実（客観）と意見（主観）を仕分ける。説得力のある文章の型「PREP 法」を習得する。提示されたデータをもとに、PREP 法を用いて「意見文」を作成する。型をもとに「感想文」を作成する。			
	6	情報の統合と表出（総まとめ）	全 5 回のスキルの再確認。「主述のねじれ」などの陥りやすいミスの注意喚起。「学習・睡眠時間と成績の関係」を題材に、読解・分析・記述のすべてを行う。赤ペンで自分の読み解きのミスを修正し、6 回全体の成長を振り返る。			
	7	わかりやすい発表（1）	プレゼンテーションの方法、情報収集 スライド・読み原稿の作成			
	8	わかりやすい発表（2）	スライド・読み原稿の修正 発表と聴講のポイント			
	9	わかりやすい発表（3）	プレゼンテーションを実施 聴講体験 フィードバックを受ける			
	10	実習直前講座（1）口頭報告	書き言葉と話し言葉、挨拶の仕方や敬語の使い方について学ぶ。			
	11	実習直前講座（2）お礼	臨床実習の目的と学習の流れについて理解する。お礼状の			

		状	目的、書き方や内容について学ぶ。
	12	実習直前講座（3） 学生紹介書	学生紹介書の目的、書き方や内容について学ぶ。
	13	実習直前講座（4） メモ、パーソナルポートフォリオ	評価場面記録の書き方について学ぶ。パーソナルポートフォリオの書き方について学ぶ。
	14	実習直前講座（5） 評価場面記録	評価場面記録の書き方について学ぶ。
	15	実習直前講座（6） 実習日誌	実習日誌の書き方について学ぶ。SOAP について学ぶ。

[illegible]

授業科目	病理学概論 A		担当教員	安彦 善裕	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	病理学は、病気の成り立ちを探究する学問であり、医療従事者にとって不可欠な学問である。生理学などで学習した正常な細胞、組織、器官の形態が病気によってどのように変化するか、または、正常な生体機能が障害された場合、どのような病態に進展するかを学習する。				
到達目標	1.病理学とは何かについて、病理診断の意義について説明できる。 2.各疾患の病因、病態について説明できる。				
テキスト・参考図書等	教科書：医療系学生のための病理学 第5版 （講談社） 参考書：病気の地図帳（講談社）、遺伝子の地図帳（西村書店）、ルービン 「カラー 基本病理学」（訳本）（西村書店）				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	試験で 60%未満の者には再試験を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物				
	その他	0			
履修上の留意事項	・指定した教科書を事前に読んでおくこと。 ・病理学を学び、理解するには解剖学および生理学の知識が必須である。病因・病態を理解し易くするために、解剖学および生理学について復習し、整理・理解しておくこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	病気と病理学	病理学とは何か、病理診断の意義、治療時における病理学の必要性、病気の発症		
	2	細胞の異常－病気の本態	細胞の構造と細胞障害、正常細胞の新陳代謝、再生と修復、ヒトの体の多層構造		
	3	循環障害	循環器系の働き、循環障害、循環障害によって発症する主な疾患と病態		
	4	代謝異常①	代謝とは何か、代謝異常、糖代謝と糖代謝異常、脂質代謝と脂質代謝異常		
	5	代謝異常②	核酸代謝と核酸代謝異常、タンパク代謝とタンパク代謝異常、カルシウム代謝とカルシウム代謝異常、代謝障害によって発症する主な疾患		
	6	先天異常	遺伝とは何か、先天異常とは、遺伝要因、環境要因		
	7	老化	老化とは何か、細胞の老化と個体の老化、老化に伴う各臓器の変化、老化により発生する疾患		
	8	炎症①	炎症の正体、炎症とはどのように起こるのか		
	9	炎症②	炎症の分類		
	10	炎症③	炎症の全身反応		
	11	免疫と免疫異常①	免疫機構、アレルギー、自己免疫疾患		
	12	免疫と免疫異常②	免疫不全症、移植免疫、免疫および免疫異常によって発症する主な疾患		
	13	腫瘍①	癌とは何か、腫瘍の分類、癌の特性		
	14	腫瘍②	腫瘍マーカーと癌の診断、癌の治療		
	15	統括	これまでの講義内容の統括		

[illegible]

授業科目	病理学概論 B		担当教員	安彦 善裕	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	病理学は、病気の成り立ちを探究する学問であり、医療従事者にとって不可欠な学問である。生理学などで学習した正常な細胞、組織、器官の形態が病気によってどのように変化するか、または、正常な生体機能が障害された場合、どのような病態に進展するかを学習する。				
到達目標	1.病理学とは何かについて、病理診断の意義について説明できる。 2.各疾患の病因、病態について説明できる。				
テキスト・参考図書等	教科書：医療系学生のための病理学 第5版 （講談社） 参考書：病気の地図帳（講談社）、遺伝子の地図帳（西村書店）、ルービン 「カラー 基本病理学」（訳本）（西村書店）				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	試験で 60%未満の者には再試験を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物				
	その他	0			
履修上の留意事項	・指定した教科書を事前に読んでおくこと。 ・病理学を学び、理解するには解剖学および生理学の知識が必須である。病因・病態を理解し易くするために、解剖学および生理学について復習し、整理・理解しておくこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	病気と病理学	病理学とは何か、病理診断の意義、治療時における病理学の必要性、病気の発症		
	2	細胞の異常－病気の本態	細胞の構造と細胞障害、正常細胞の新陳代謝、再生と修復、ヒトの体の多層構造		
	3	循環障害	循環器系の働き、循環障害、循環障害によって発症する主な疾患と病態		
	4	代謝異常①	代謝とは何か、代謝異常、糖代謝と糖代謝異常、脂質代謝と脂質代謝異常		
	5	代謝異常②	核酸代謝と核酸代謝異常、タンパク代謝とタンパク代謝異常、カルシウム代謝とカルシウム代謝異常、代謝障害によって発症する主な疾患		
	6	先天異常	遺伝とは何か、先天異常とは、遺伝要因、環境要因		
	7	老化	老化とは何か、細胞の老化と個体の老化、老化に伴う各臓器の変化、老化により発生する疾患		
	8	炎症①	炎症の正体、炎症とはどのように起こるのか		
	9	炎症②	炎症の分類		
	10	炎症③	炎症の全身反応		
	11	免疫と免疫異常①	免疫機構、アレルギー、自己免疫疾患		
	12	免疫と免疫異常②	免疫不全症、移植免疫、免疫および免疫異常によって発症する主な疾患		
	13	腫瘍①	癌とは何か、腫瘍の分類、癌の特性		
	14	腫瘍②	腫瘍マーカーと癌の診断、癌の治療		
	15	統括	これまでの講義内容の統括		

[illegible]

授業科目	理学療法概論ⅠA		担当教員	吉田 香織	
対象年次・学期	1年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	30回	時間数
授業目的	理学療法や理学療法士の概要や対象となる障害、領域について学び、卒業までに獲得が必要な能力について理解する。				
到達目標	・理学療法、理学療法士について説明できる ・理学療法士の仕事の内容を把握し、理学療法士になるために何が必要かを考え述べることができる。 ・理学療法の対象となる障害について学び、それによって動作や生活にどのような影響が生じるか説明できる。				
テキスト・参考図書等	シンプル理学療法シリーズ 理学療法概論テキスト 第4版 リハビリテーションビジュアルブック 第2版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	95	定期試験（前期・後期）および提出物により総合的に評価。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	5			
	その他	0			
履修上の留意事項	自分がどのような理学療法士になりたいか、常に考えながら授業に参加すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション 理学療法、理学療法士とは リハビリテーションとは	理学療法・理学療法士の定義、概要について学ぶ リハビリテーションの概要について学ぶ		
	2	理学療法士の教育課程と職能	免許取得までの過程と、そのために何が必要かについて学ぶ		
	3	理学療法と研究	卒業研究発表を聴講し、研究の概要について学ぶ		
	4	理学療法士法・作業療法士法	理学療法士法・作業療法士法について学ぶ		
	5	理学療法の歴史1	理学療法の歴史について学ぶ1（グループ演習）		
	6	理学療法の歴史2	理学療法の歴史について学ぶ2（グループ発表）		
	7	感染予防対策	感染のメカニズムと医療職に求められる予防、対策について学ぶ		
	8	理学療法の流れ、手段	理学療法の流れや運動療法、物理療法の概要について学ぶ		
	9	理学療法評価体験	対象者の立場で理学療法評価を実際に体験する		
	10	障がいとは1	障がいについて考える1（グループ演習）		
	11	障がいとは2	障害について考える2（グループ発表）		
	12	国際障害分類	ICIDH の概念について学ぶ		
	13	国際生活機能分類1	ICF の概念について学ぶ1		
	14	障がいとは2	ICF の概念について学ぶ2		
15	国際生活機能分類3	ICF の概念について学ぶ3			

	16	事例検討	ICF を用いて身近な事例について検討する（グループ演習）
	17	廃用症候群、過用症候群、サルコペニア、フレイル、ロコモティブシンドローム	廃用症候群、過用症候群、サルコペニア、フレイル、ロコモティブシンドロームについて学ぶ
	18	痛み	痛みとその発生機序について学び、動作や生活への影響を理解する
	19	関節可動域	関節可動域制限とその発生機序について学び、動作や生活への影響を理解する
	20	筋力低下	筋力低下とその発生機序について学び、動作や生活への影響を理解する
	21	持久力	持久力にその障害について学び、動作や生活への影響を理解する
	22	協調性	協調性とその障害について学び、動作や生活への影響を理解する
	23	中枢神経病変	中枢神経病変の特徴と発生機序について学び、動作や生活への影響を理解する
	24	病期ごとのリハビリテーション、理学療法	病期ごとのリハビリ、理学療法について学ぶとともに、事例を通して理学療法の経過について学ぶ
	25	なぜリハビリが必要なのか	当事者からみたリハビリテーション
	26	理学療法にかかわる制度 1	診療報酬について学ぶ
	27	理学療法にかかわる制度 2	介護保険、地域包括支援システムについて学ぶ
	28	理学療法士が働く職域と関連職種	理学療法士が勤務する職域と、関連職種について理解を深める
	29	疾患ごとの理学療法 1（グループ演習）	理学療法の対象となる代表的な疾患について、その概要や理学療法、動作や生活への影響について学ぶ 1
	30	疾患ごとの理学療法 2（グループ発表）	理学療法の対象となる代表的な疾患について、その概要や理学療法、動作や生活への影響について学ぶ 2

授業科目	理学療法概論ⅠA	担当 教員 実務 経験	吉田香織 有：■ 無：□	道内の総合病院に理学療法士として10年以上勤務
対象年次・学期	1年・通年	担当 教員	浜本浩一	道内外の総合病院等で理学療法士として16年間勤務
授業形態		実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	竹中謙将 有：■ 無：□	道内の病院で10年、老人保健施設で5年、理学療法士として勤務
		担当 教員 実務 経験	武田祐貴 有：■ 無：□	市内脳神経外科病院にて理学療法士として12年間勤務
		担当 教員 実務 経験	元木純 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として18年間勤務
		担当 教員 実務 経験	横野裕行 有：■ 無：□	道内・外の病院で理学療法士として8年勤務
		担当 教員 実務 経験	小野直也 有：■ 無：□	市内回復期病院にて理学療法士として5年間勤務
		担当 教員 実務 経験	吉田智子 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として10年以上勤務
		担当 教員 実務 経験	有本邦洋 有：■ 無：□	道外医療施設にて理学療法士として6年勤務
		担当 教員 実務 経験	塚田雅弘 有：■ 無：□	市内整形外科、クリニックにて理学療法士として20年以上勤務
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	理学療法概論ⅠB		担当教員	吉田 香織	
対象年次・学期	1年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	30回	時間数
授業目的	理学療法や理学療法士の概要や対象となる障害、領域について学び、卒業までに獲得が必要な能力について理解する				
到達目標	・理学療法、理学療法士について説明できる ・理学療法士の仕事の内容を把握し、理学療法士になるために何が必要かを考え述べることができる ・理学療法の対象となる障害について学び、それによって生じる対象者の不利益を理解し、説明できる				
テキスト・参考図書等	シンプル理学療法シリーズ 理学療法概論テキスト 第4版 リハビリテーションビジュアルブック 第2版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	95	定期試験（前期・後期）および提出物により総合的に評価。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	5			
	その他	0			
履修上の留意事項	自分がどのような理学療法士になりたいか、なるためには何が必要かを常に考えながら授業に参加してください				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション 理学療法、理学療法士とは リハビリテーションとは	理学療法・理学療法士の定義、概要について学ぶ リハビリテーションの概要について学ぶ		
	2	理学療法士の教育課程と職能	免許取得までの過程と、そのために何が必要かについて学ぶ		
	3	理学療法と研究	卒業研究発表を聴講する		
	4	理学療法士法・作業療法士法	理学療法士法・作業療法士法について学ぶ		
	5	理学療法の歴史1	理学療法の歴史について学ぶ1（グループ演習）		
	6	理学療法の歴史2	理学療法の歴史について学ぶ2（グループ発表）		
	7	感染予防対策	感染のメカニズムと医療職に求められる予防、対策について学ぶ		
	8	理学療法評価体験	対象者の立場で理学療法評価を実際に体験する		
	9	理学療法の流れ、手段	理学療法の流れや運動療法、物理療法の概要について学ぶ		
	10	障がいとは1	障がいについて考える1（グループ演習）		
	11	障がいとは2	障害について考える2（グループ発表）		
	12	国際障害分類	ICIDH の概念について学ぶ		
	13	国際生活機能分類1	ICF の概念について学ぶ1		
	14	国際生活機能分類2	ICF の概念について学ぶ2		
	15	国際生活機能分類3	ICF の概念について学ぶ3		
	16	事例検討	CF を用いて身近な事例について検討する（グループ演習）		

	17	廃用症候群、過用症候群、サルコペニア、フレイル、ロコモティブシンドローム	廃用症候群、過用症候群、サルコペニア、フレイル、ロコモティブシンドロームについて学ぶ
	18	痛み	痛みとその発生機序について学び、動作や生活への影響を理解する
	19	関節可動域	関節可動域制限とその発生機序について学び、動作や生活への影響を理解する
	20	筋力低下	筋力低下とその発生機序について学び、動作や生活への影響を理解する
	21	持久力	持久力とその障害について学び、動作や生活への影響を理解する
	22	協調性	協調性とその障害について学び、動作や生活への影響を理解する
	23	中枢神経病変	中枢神経病変の特徴と発生機序について学び、動作や生活への影響を理解する
	24	病期ごとのリハビリテーション、理学療法	病期ごとのリハビリ、理学療法について学ぶとともに、事例を通して理学療法の経過について学ぶ
	25	なぜリハビリが必要なのか	当事者からみたりハビリテーション
	26	理学療法にかかわる制度 1	診療報酬について学ぶ
	27	理学療法にかかわる制度 2	介護保険、地域包括支援システムについて学ぶ
	28	理学療法士が働く職域と関連職種	理学療法士が勤務する職域と、関連職種について理解を深める
	29	疾患ごとの理学療法 1（グループ演習）	理学療法の対象となる代表的な疾患について、その概要や理学療法、動作や生活への影響について学ぶ 1
	30	疾患ごとの理学療法 2（グループ発表）	理学療法の対象となる代表的な疾患について、その概要や理学療法、動作や生活への影響について学ぶ 2

授業科目	理学療法概論ⅠB	担当 教員 実務 経験	吉田香織 有：■ 無：□	道内の総合病院に理学療法士として10年以上勤務
対象年次・学期	1年・通年	担当 教員	浜本浩一	道内外の総合病院等で理学療法士として16年間勤務
授業形態		実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	竹中謙将 有：■ 無：□	道内の病院で10年、老人保健施設で5年、理学療法士として勤務
		担当 教員 実務 経験	武田祐貴 有：■ 無：□	市内脳神経外科病院にて理学療法士として12年間勤務
		担当 教員 実務 経験	元木純 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として18年間勤務
		担当 教員 実務 経験	横野裕行 有：■ 無：□	道内・外の病院で理学療法士として8年勤務
		担当 教員 実務 経験	小野直也 有：■ 無：□	市内回復期病院にて理学療法士として5年間勤務
		担当 教員 実務 経験	吉田智子 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として10年以上勤務
		担当 教員 実務 経験	有本邦洋 有：■ 無：□	道外医療施設にて理学療法士として6年勤務
		担当 教員 実務 経験	塚田雅弘 有：■ 無：□	市内整形外科、クリニックにて理学療法士として20年以上勤務
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	理学療法研究法ⅠA		担当教員	横野 裕行	
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	・理学療法において研究とは、臨床で起こる様々な問題を解決するためのプロセスである。 ・本科目では研究の意義を理解すること、医学的な英文への抵抗をなくすこと、統計処理について理解すること。				
到達目標	・研究の意義を理解し、自ら疑問を解決しようと行動できる ・統計の考え方の初歩を理解できること				
テキスト・参考図書等	なし				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	ポスター発表 50点と定期試験 50点にて評定し、合計 60点以上を合格とする。 合計 60点未満の場合は、再試験にて 60点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	50			
履修上の留意事項	自ら能動的に調べる、考えることが必要な授業です。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	研究とは・研究的思考法とは		
	2	研究の流れを体験しよう	自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	3	研究の流れを体験しよう	自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	4	研究の流れを体験しよう	自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	5	疑問を研究ではどう調べるのか	クリニカルクエスチョン・PICO・リサーチクエスチョン・情報検索方法を学ぶ		
	6	知っている専門用語について調べてみよう	理学療法に関わる自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	7	知っている専門用語について調べてみよう	理学療法に関わる自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	8	知っている専門用語について調べてみよう	理学療法に関わる自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	9	知っている専門用語について調べてみよう	理学療法に関わる自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	10	文献について知ろう	文献の種類・検索方法を知る		
	11	文献について知ろう②	文献の構成・内容、有意差とは何か知る		
	12	疑問を調べてみよう	自身の疑問をから、文献を調べ、調査結果をスライドにまとめる・ポスター発表する		
	13	疑問を調べてみよう	自身の疑問をから、文献を調べ、調査結果をスライドにまとめる・ポスター発表する		
	14	疑問を調べてみよう	自身の疑問をから、文献を調べ、調査結果をスライドにまとめる・ポスター発表する		
	15	疑問を調べてみよう	自身の疑問をから、文献を調べ、調査結果をスライドにまとめる・ポスター発表する		

[illegible]

授業科目	理学療法研究法ⅠB		担当教員	横野 裕行	
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	・理学療法において研究とは、臨床で起こる様々な問題を解決するためのプロセスである。 ・本科目では研究の意義を理解すること、医学的な英文への抵抗をなくすこと、統計処理について理解すること。				
到達目標	・研究の意義を理解し、自ら疑問を解決しようと行動できる ・統計の考え方の初歩を理解できること				
テキスト・参考図書等	なし				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	ポスター発表 50点と定期試験 50点にて評定し、合計 60点以上を合格とする。 合計 60点未満の場合は、再試験にて 60点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	50			
履修上の留意事項	自ら能動的に調べる、考えることが必要な授業です。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	研究とは・研究的思考法とは		
	2	研究の流れを体験しよう	自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	3	研究の流れを体験しよう	自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	4	研究の流れを体験しよう	自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	5	疑問を研究ではどう調べるのか	クリニカルクエスチョン・PICO・リサーチクエスチョン・情報検索方法を学ぶ		
	6	知っている専門用語について調べてみよう	理学療法に関わる自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	7	知っている専門用語について調べてみよう	理学療法に関わる自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	8	知っている専門用語について調べてみよう	理学療法に関わる自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	9	知っている専門用語について調べてみよう	理学療法に関わる自身の疑問を調べる・ポスター発表する		
	10	文献について知ろう	文献の種類・検索方法を知る		
	11	文献について知ろう②	文献の構成・内容、有意差とは何か知る		
	12	疑問を調べてみよう	自身の疑問をから、文献を調べ、調査結果をスライドにまとめる・ポスター発表する		
	13	疑問を調べてみよう	自身の疑問をから、文献を調べ、調査結果をスライドにまとめる・ポスター発表する		
	14	疑問を調べてみよう	自身の疑問をから、文献を調べ、調査結果をスライドにまとめる・ポスター発表する		
	15	疑問を調べてみよう	自身の疑問をから、文献を調べ、調査結果をスライドにまとめる・ポスター発表する		

[illegible]

授業科目	理学療法評価法ⅠA		担当教員	浜本 浩一	
対象年次・学期	1年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	30回	時間数
授業目的	理学療法にとって「評価」とは、「患者さんにとって、治療を必要とする場所を分析・明確化する」、「自分が施した治療の効果を確認、治療方針を再検討する」という意味がある。そのため、本科目では、以下4項目を目的として掲げている。1. 授業を通じて、理学療法士の職業内容・イメージをより具体的に持つ、2. 解剖学・運動学で学習した内容と、評価の意義・方法を関連付けて考えられるようになる、3. 方法の説明・リスク管理・配慮を含めた正確な評価手技を実施出来る（実技試験）、4. 評価の目的・意義や評価結果から考えられる事を説明・記述出来る（定期試験）				
到達目標	・理学療法評価について理解する。 ・肢長周径・関節可動域測定・バイタル測定の基本的な検査測定手技を習得する。				
テキスト・参考図書等	理学療法評価学 第6版補訂版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	・筆記試験、実技試験（前後期の合算にて成績判定）		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・解剖・運動学の復習をして授業に臨むこと。・授業は触診を行いやすく、動きやすい服装を用意すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	評価の意義・流れ	評価を学ぶにあたって、その意味するものを学ぶ		
	2	評価の意義・流れ	評価を学ぶにあたって、その意味するものを学ぶ		
	3	問診・視診・触診	問診・視診の目的と内容について学ぶ		
	4	問診・視診・触診	問診・視診の目的と内容について学ぶ		
	5	問診・視診・触診	問診・視診の目的と内容について学ぶ		
	6	形態計測	形態計測の中の肢長について学ぶ		
	7	形態計測	形態計測の中の肢長について学ぶ		
	8	形態計測	形態計測の中の周径について学ぶ		
	9	形態計測	形態計測の中の周径について学ぶ		
	10	形態計測の実技演習	形態計測の中の肢長・周径について学ぶ		
	11	形態計測の実技演習	形態計測の中の肢長・周径について学ぶ		
	12	形態計測の実技演習	形態計測の中の肢長・周径について学ぶ（チェックテスト）		
	13	形態計測の実技演習	形態計測の中の肢長・周径について学ぶ（チェックテスト）		
	14	形態計測の実技演習	形態計測の中の肢長・周径について学ぶ（チェックテスト）		
	15	関節可動域テスト	上肢の関節可動域テストについて学ぶ		
	16	関節可動域テスト	上肢の関節可動域テストについて学ぶ		
	17	関節可動域テスト	下肢の関節可動域テストについて学ぶ		
	18	関節可動域テスト	下肢の関節可動域テストについて学ぶ		
	19	関節可動域テスト	体幹の関節可動域テストについて学ぶ		
	20	関節可動域テスト	体幹の関節可動域テストについて学ぶ		

	21	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ
	22	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ
	23	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ、チェックテスト
	24	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ、チェックテスト
	25	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ、チェックテスト
	26	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ、チェックテスト
	27	バイタルサインについて	バイタルサインについて学ぶ。
	28	呼吸数・脈拍測定	呼吸と呼吸数の測定、循環器と脈拍の測定について
	29	血圧測定	血圧の測定について
	30	バイタル測定実習	バイタル測定実習

[illegible]

授業科目	理学療法評価法ⅠB		担当教員	浜本 浩一	
対象年次・学期	1年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	30回	時間数 60時間
授業目的	理学療法にとって「評価」とは、「患者さんにとって、治療を必要とする場所を分析・明確化する」、「自分が施した治療の効果を確認、治療方針を再検討する」という意味がある。そのため、本科目では、以下4項目を目的として掲げている。1. 授業を通じて、理学療法士の職業内容・イメージをより具体的に持つ、2. 解剖学・運動学で学習した内容と、評価の意義・方法を関連付けて考えられるようになる、3. 方法の説明・リスク管理・配慮を含めた正確な評価手技を実施出来る（実技試験）、4. 評価の目的・意義や評価結果から考えられる事を説明・記述出来る（定期試験）				
到達目標	・理学療法評価について理解する。 ・肢長周径・関節可動域測定・バイタル測定の基本的な検査測定手技を習得する。				
テキスト・参考図書等	理学療法評価学 第6版補訂版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	・筆記試験、実技試験（前後期の合算にて成績判定）		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・解剖・運動学の復習をして授業に臨むこと。・授業は触診を行いやすく、動きやすい服装を用意すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	評価の意義・流れ	評価を学ぶにあたって、その意味するものを学ぶ		
	2	評価の意義・流れ	評価を学ぶにあたって、その意味するものを学ぶ		
	3	問診・視診・触診	問診・視診の目的と内容について学ぶ		
	4	問診・視診・触診	問診・視診の目的と内容について学ぶ		
	5	問診・視診・触診	問診・視診の目的と内容について学ぶ		
	6	形態計測	形態計測の中の肢長について学ぶ		
	7	形態計測	形態計測の中の肢長について学ぶ		
	8	形態計測	形態計測の中の周径について学ぶ		
	9	形態計測	形態計測の中の周径について学ぶ		
	10	形態計測の実技演習	形態計測の中の肢長・周径について学ぶ		
	11	形態計測の実技演習	形態計測の中の肢長・周径について学ぶ		
	12	形態計測の実技演習	形態計測の中の肢長・周径について学ぶ（チェックテスト）		
	13	形態計測の実技演習	形態計測の中の肢長・周径について学ぶ（チェックテスト）		
	14	形態計測の実技演習	形態計測の中の肢長・周径について学ぶ（チェックテスト）		
	15	関節可動域テスト	上肢の関節可動域テストについて学ぶ		
	16	関節可動域テスト	上肢の関節可動域テストについて学ぶ		
	17	関節可動域テスト	下肢の関節可動域テストについて学ぶ		
	18	関節可動域テスト	下肢の関節可動域テストについて学ぶ		
	19	関節可動域テスト	体幹の関節可動域テストについて学ぶ		
	20	関節可動域テスト	体幹の関節可動域テストについて学ぶ		

	21	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ
	22	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ
	23	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ、チェックテスト
	24	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ、チェックテスト
	25	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ、チェックテスト
	26	関節可動域テストの実技演習	上肢・体幹・下肢の関節可動域テストについて学ぶ、チェックテスト
	27	バイタルサインについて	バイタルサインについて学ぶ。
	28	呼吸数・脈拍測定	呼吸と呼吸数の測定、循環器と脈拍の測定について
	29	血圧測定	血圧の測定について
	30	バイタル測定実習	バイタル測定実習

[illegible]

授業科目	臨床見学実習 A		担当教員	塚田 雅弘	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	0 回	時間数
授業目的	臨床見学実習の意義は、病院（施設）の見学を通じて今後の学内における知識・技術習得をより効果的かつ有意義に行えるよう意欲を高めることにある。また、社会の中における理学療法士の役割と責任の概要を理解し、把握することにある。				
到達目標	a) 専門職としてふさわしい態度・行動について認識する。 b) 医療関連職種に限らず、保健・福祉などにおける理学療法士の役割・分担について認識する。 c) 患者・障害者（児）の持つ諸問題を認識する。 d) 病院（施設）、あるいは理学療法士が関わる事業の目的・役割およびその流れについて理解する。 e) 臨床見学を通じて、学内で履修した知識及び技術を確認し第 2 学年への学習意欲をさらに高め、知識技術習得の目的を具体的にする。				
テキスト・参考図書等	臨床実習の手引き				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験		実習前セミナー出席状況、臨床実習の出席状況、実習態度、実習報告会の出席状況、提出物等を併せ、総合的に評価する。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物	20			
	その他	80			
履修上の留意事項	初めての臨床見学実習である。緊張すると思うが、有意義な実習とするためには、自ら目標を明確に持ち、積極性を持って実習に望むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	【1～23 回】 臨床実習	各実習施設に赴き実習指導者の監視下・指示のもと、臨床場面の見学、対象者とのコミュニケーション等を通して学ぶ。		

授業科目	臨床見学実習 A	担当 教員 実務 経験	元木純 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として18年間勤務
対象年次・学期	1年・後期	担当 教員	浜本浩一	道内外の総合病院等で理学療法士として16年間勤務
授業形態		実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	吉田香織 有：■ 無：□	道内の総合病院に理学療法士として10年以上勤務
		担当 教員 実務 経験	竹中謙将 有：■ 無：□	道内の病院で10年、老人保健施設で7年、理学療法士として勤務
		担当 教員 実務 経験	有本邦洋 有：■ 無：□	道外医療施設にて理学療法士として6年間勤務
		担当 教員 実務 経験	吉田智子 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として10年以上勤務
		担当 教員 実務 経験	武田祐貴 有：■ 無：□	市内脳神経外科病院にて理学療法士として12年間勤務
		担当 教員 実務 経験	横野裕行 有：■ 無：□	道内・外の病院で理学療法士として8年勤務
		担当 教員 実務 経験	小野直也 有：■ 無：□	市内回復期病院にて理学療法士として5年間勤務
		担当 教員 実務 経験	塚田雅弘 有：■ 無：□	市内整形外科、クリニックにて理学療法士として20年以上勤務
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	臨床見学実習 B		担当教員	塚田 雅弘	
対象年次・学期	1 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	0 回	時間数
授業目的	臨床見学実習の意義は、病院（施設）の見学を通じて今後の学内における知識・技術習得をより効果的かつ有意義に行えるよう意欲を高めることにある。また、社会の中における理学療法士の役割と責任の概要を理解し、把握することにある。				
到達目標	a) 専門職としてふさわしい態度・行動について認識する。 b) 医療関連職種に限らず、保健・福祉などにおける理学療法士の役割・分担について認識する。 c) 患者・障害者（児）の持つ諸問題を認識する。 d) 病院（施設）、あるいは理学療法士が関わる事業の目的・役割およびその流れについて理解する。 e) 臨床見学を通じて、学内で履修した知識及び技術を確認し第 2 学年への学習意欲をさらに高め、知識技術習得の目的を具体的にする。				
テキスト・参考図書等	臨床実習の手引き				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験		実習前セミナー出席状況、臨床実習の出席状況、実習態度、実習報告会の出席状況、提出物等を併せ、総合的に評価する。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物	20			
	その他	80			
履修上の留意事項	初めての臨床見学実習である。緊張すると思うが、有意義な実習とするためには、自ら目標を明確に持ち、積極性を持って実習に望むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	【1～23 回】 臨床実習	各実習施設に赴き実習指導者の監視下・指示のもと、臨床場面の見学、対象者とのコミュニケーション等を通して学ぶ。		

授業科目	臨床見学実習 B	担当 教員 実務 経験	元木純 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として18年間勤務
対象年次・学期	1年・後期	担当 教員	浜本浩一	道内外の総合病院等で理学療法士として16年間勤務
授業形態		実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	吉田香織 有：■ 無：□	道内の総合病院に理学療法士として10年以上勤務
		担当 教員 実務 経験	竹中謙将 有：■ 無：□	道内の病院で10年、老人保健施設で7年、理学療法士として勤務
		担当 教員 実務 経験	有本邦洋 有：■ 無：□	道外医療施設にて理学療法士として6年間勤務
		担当 教員 実務 経験	吉田智子 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法士として10年以上勤務
		担当 教員 実務 経験	武田祐貴 有：■ 無：□	市内脳神経外科病院にて理学療法士として12年間勤務
		担当 教員 実務 経験	横野裕行 有：■ 無：□	道内・外の病院で理学療法士として8年勤務
		担当 教員 実務 経験	小野直也 有：■ 無：□	市内回復期病院にて理学療法士として5年間勤務
		担当 教員 実務 経験	塚田雅弘 有：■ 無：□	市内整形外科、クリニックにて理学療法士として20年以上勤務
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	スポーツリハビリテーション概論 A		担当教員	元木 純	
対象年次・学期	1 年・通年		必修・選択区分	選択・8 単位	単位数
授業形態		授業回数	8 回	時間数	15 時間
授業目的	スポーツリハビリテーションについての概要を理解し、スポーツ医学を基礎としたスポーツリハビリテーションの考え方について学ぶ。 スポーツリハビリテーションの基本的な考え方や実践方法を習得する。				
到達目標	スポーツリハビリテーションの概要（歴史や社会的意義、多職種連携）について理解し、説明できる。 スポーツリハビリテーションの実践方法について理解し、習得する。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	試験		各講義内容についてのサマリーシートの提出（100 点満点）中 60 点以上で合格とする。 60 点未満の者は、課題再提出とし 60 点以上を合格とする。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物	100			
	その他				
履修上の留意事項	事前の体調管理や着替えなどの準備をし、講義中の事故防止に各自で努めること				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	スポーツリハビリテーション総論	・スポーツリハビリテーションの概要、スポーツリハビリテーションが果たす役割とその社会的背景や社会的意義、歴史、関わる職種などについて学ぶ		
	2	スポーツリハビリテーションにおける多職種連携①	・スポーツファーマシストによる講義を通して、特にドーピングについての知識を深める。また、スポーツリハビリテーションにおける多職種連携について学ぶ		
	3	スポーツリハビリテーションにおける多職種連携②	・スポーツ栄養士による講義を通して、特にスポーツ栄養学についての知識を深める。また、スポーツリハビリテーションにおける多職種連携について学ぶ		
	4	傷害予防のための	・スポーツ傷害の予防や体調管理に必要な運動前・後のウォーミングアップ・クーリングダウンについての知識と実践方法について学ぶ		

		ウォーミングアップとクーリングダウン	
	5	スポーツリハビリテーションのための機能的評価	・スポーツリハビリテーションに必要な機能的評価方法について学ぶ
	6	傷害からの復帰のためのリハビリテーションの実際	・ケガからのスポーツ活動復帰のためのリハビリテーション（運動療法）の知識と実践方法について学ぶ
	7	パラスポーツの意義と理念	・パラスポーツについての理念と社会的意義、その歴史や施策について学ぶ ・パラ選手をサポートするために必要な資質や能力、心構えについて学ぶ
	8	パラスポーツに関する諸施策	・障がい者福祉施策とその歴史、障がい者の生活状況について学ぶ ・パラスポーツについての諸施策について学ぶ

授業科目	スポーツリハビリテーション 概論 A	担当 教員 実務 経験	網谷 勇俊 有：■ 無：□	市内スポーツ施設にて PT・鍼灸 師・トレーナーとしてアスリート やスポーツ愛好者の健康増進・外 傷予防活動に従事
対象年次・学期	1 年・通年	担当 教員	滑川 新太郎	市内整形外科クリニック併設の メディカルフィットネス施設に て理学療法士兼トレーナーとし て勤務
授業形態		実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	檜館 強拓 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法 士として勤務。パラカヌー競技の アスリートサポート活動に従事
		担当 教員 実務 経験	安部 朋美 有：■ 無：□	理学療法士として医療機関に勤 務。バイアスロン競技トレーナ ー・JPSA パラトレーナー活動(オ リ・パラ帯同)に従事
		担当 教員 実務 経験	小松 信隆 有：■ 無：□	スポーツ栄養士としてアスリー トの食事管理を通じてコンディ ショニングサポートに従事
		担当 教員 実務 経験	阿部 忍 有：■ 無：□	スポーツファーマシストとして アスリートのドーピング防止活 動に従事
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	スポーツリハビリテーション概論B		担当教員	元木 純	
対象年次・学期	1 年・通年		必修・選択区分	選択・8 単位	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	スポーツリハビリテーションについての概要を理解し、スポーツ医学を基礎としたスポーツリハビリテーションの考え方について学ぶ。 スポーツリハビリテーションの基本的な考え方や実践方法を習得する。				
到達目標	スポーツリハビリテーションの概要（歴史や社会的意義、多職種連携）について理解し、説明できる。 スポーツリハビリテーションの実践方法について理解し、習得する。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合 (%)	評価基準		
	試験		各講義内容についてのサマリーシートの提出（100 点満点）中 60 点以上で合格とする。 60 点未満の者は、課題再提出とし 60 点以上を合格とする。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物	100			
	その他				
履修上の留意事項	事前の体調管理や着替えなどの準備をし、講義中の事故防止に各自で努めること				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	スポーツリハビリテーション総論	・スポーツリハビリテーションの概要、スポーツリハビリテーションが果たす役割とその社会的背景や社会的意義、歴史、関わる職種などについて学ぶ		
	2	スポーツリハビリテーションにおける多職種連携①	・スポーツファーマシストによる講義を通して、特にドーピングについての知識を深める。また、スポーツリハビリテーションにおける多職種連携について学ぶ		
	3	スポーツリハビリテーションにおける多職種連携②	・スポーツ栄養士による講義を通して、特にスポーツ栄養学についての知識を深める。また、スポーツリハビリテーションにおける多職種連携について学ぶ		
	4	傷害予防のための	・スポーツ傷害の予防や体調管理に必要な運動前・後のウォーミングアップ・クーリングダウンについての知識と実践方法について学ぶ		

		ウォーミングアップとクーリングダウン	
	5	スポーツリハビリテーションのための機能的評価	・スポーツリハビリテーションに必要な機能的評価方法について学ぶ
	6	傷害からの復帰のためのリハビリテーションの実際	・ケガからのスポーツ活動復帰のためのリハビリテーション（運動療法）の知識と実践方法について学ぶ
	7	パラスポーツの意義と理念	・パラスポーツについての理念と社会的意義、その歴史や施策について学ぶ ・パラ選手をサポートするために必要な資質や能力、心構えについて学ぶ
	8	パラスポーツに関する諸施策	・障がい者福祉施策とその歴史、障がい者の生活状況について学ぶ ・パラスポーツについての諸施策について学ぶ

授業科目	スポーツリハビリテーション 概論 B	担当 教員 実務 経験	網谷 勇俊 有：■ 無：□	市内スポーツ施設にて PT・鍼灸 師・トレーナーとしてアスリート やスポーツ愛好者の健康増進・外 傷予防活動に従事
対象年次・学期	1 年・通年	担当 教員	滑川 新太郎	市内整形外科クリニック併設の メディカルフィットネス施設に て理学療法士兼トレーナーとし て勤務
授業形態		実務 経験	有：■ 無：□	
		担当 教員 実務 経験	檜館 強拓 有：■ 無：□	市内整形外科病院にて理学療法 士として勤務。パラカヌー競技の アスリートサポート活動に従事
		担当 教員 実務 経験	安部 朋美 有：■ 無：□	理学療法士として医療機関に勤 務。バイアスロン競技トレーナ ー・JPSA パラトレーナー活動(オ リ・パラ帯同)に従事
		担当 教員 実務 経験	小松 信隆 有：■ 無：□	スポーツ栄養士としてアスリー トの食事管理を通じてコンディ ショニングサポートに従事
		担当 教員 実務 経験	阿部 忍 有：■ 無：□	スポーツファーマシストとして アスリートのドーピング防止活 動に従事
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		